
神？ ああ、俺の前で土下座してるよ

貝柱帆立

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神？ ああ、俺の前で土下座してるよ

【Nコード】

N6861K

【作者名】

貝柱帆立

【あらすじ】

「お前の兄が我々の世界を破滅させようとしている」 行方不明になった兄貴を探し始めてから一ヶ月。突如俺の部屋に現れた異世界からの案内人はそう言った。世界の主から絶大な攻撃力（未完成）を授かり、いざ異世界へ！ この世界ではパートナーがいなければ旅にすら出ることが出来ない。さらに《神の塔》を巡り、その力を解放させなければ兄貴を引き戻す事は不可能！？ ▼ ▼ ▼

▼最新話 第二章 第四話 『交差（雷and風）』 神也とシグマが二度目の交差！ いきなりの不意打ちとかシグマさんマジパネ

エっす！！　そして獣耳なパートナー2人。この4人が交わる時、
神漬しの物語は始まる……よね？

登場人物（前書き）

物語の進行と共に追加していくつもりです。

あと、すげーネタバレが多いんで気をつけてください。

登場人物

そこにわかみや
外庭神也 16歳 男

世界を滅ぼそうとしている兄を連れ戻すために異世界に向かう。
身体能力、学力、その他ほとんどの能力が兄より劣っており、何かあるごとに比較され、周囲から除け者にされている。
中学時代には鬱になっていたが、兄が支えてくれていたおかげで立ち直る事ができた。

唯一、兄に勝てることは料理の腕前らしい。

世界の主から2つの効力をもたらす紋章を授けられる。

1つは身体能力の大幅な底上げ。

もう1つは自身に秘められていた能力の解放だったが、まだ封印を完全に解くことができていない。

秘められし力の正体は神にしか扱えないという《神術》の1つである《神雷》……？

そこにわくろと
外庭黒斗 16歳 男

神也が異世界に向かう1ヶ月前に行方不明になった。

身体能力、学力、共に優秀であり、誰にでも優しく振舞うことから近所からの評判も良い。

現在、異世界にて世界を滅ぼそうとしているらしい。
人ではない何かをパートナーにしている？

ゼクタイヴオームルス
異世界からの案内人 ???歳 男？

神也を異世界へと導いた張本人。

黒いローブを纏っており、顔はフードで隠されているのでよく見えない。

世界の主と面識があることから、かなり位が高い人物だと思われる。

クオリナ 15歳 女

鉄柱に鎖で繋がれていた少女。

【氷狼】の娘でその頭には狼の耳が生えている。

現在は神也に鎖を壊され、パートナーとして彼の傍にいる。

心を開いた相手と開いていない相手とは態度が豹変する。

神也の美少女センサーが反応するほどの美少女。

デュアラ 29歳 男

《神の塔》に行けるほどの実力を備えているが、その性格ゆえにパートナーがいないため、町の外に出ることが出来ない。

自分よりも先を越されないようにするため、実力を持つ新人を見つけては潰している。

異名はその行動の通りに“新人潰し”

ジーニスⅡ ローウィラン 23歳 男

デュアラに目をつけられた新人。

ギルドに登録してから6日間で《神の塔》に行くための資格を手

に入れるが、それゆえにデュアラに命を狙われた。

シグマ 16歳 男？

黒斗の下で働く灰髪碧眼な裏の便利屋。

何の気まぐれかは知らないが神也に資格を渡す。

黒斗の事を糞野郎といい、あまり良く思っていない。
風使い。

もの凄い力を持っているが、何故か組織の下っ端にいる

リズリー 14歳 女

シグマのパートナー。

狐耳な少女で根は純粹。

ロツジエ 31歳 男

黒斗の組織の第三階層『神なき世界』に所属する下っ端な男。

だが下っ端の割には大地を思うがままに操るといふ強大な力を有する。

怒ると我を忘れるタイプ。

水神 不明 男？

4人の神の中の1人。

水を操る力を持つ。

背中からは水のような翼が生えているが片方の翼は根元から折られている。

十六話にて土下座した。

登場人物（後書き）

男キャラ多ッ！

序章 『異世界からの案内人』（前書き）

異世界に行く直後までの話です。

序章 『異世界からの案内人』

兄貴が行方不明になったのは1ヶ月前だった。

行方不明になってから3日間は、家族総出で近辺を探した。

4日目からは近所の人にも手伝ってもらい、

1週間後には警察に捜索願を出した。

しかし。

2週間を過ぎても兄貴は見つからなかった。

3週間経つと警察も捜索を打ち切り。

ついには兄貴を探しているのは自分だけとなった。

昔から兄貴は俺よりも優れていた。

テストをやらせれば確実に95点以上をマーク。

小学生にして50m走を6秒で走り、

顔はほとんど同じでも、モテるのは奴ばかり。

唯一俺があいつに勝てる 것이라고言うなら料理の腕前ぐらいだ。

5年前に母が死んでから、ずっと俺が作っていたから。

親も近所の人も俺と兄貴を比べ、俺は除け者、兄貴は人気者。

味方は、今はもういない母と、張本人——兄貴ぐらいだった。

中学生の時には、鬱で学校を休むようになった俺を、いつも兄貴が支えてくれ、そのおかげで鬱を克服することも出来た。

比べられている張本人だったが、俺は兄貴に恨みを抱いたりはしていなかった。

むしろ感謝しているぐらいだ。

だからこそ、俺は1人になっても兄貴を探していたのだが。

兄貴が消えてもう1ヶ月になる。

そろそろ俺も探すのをやめようかな、とそんな考えが頭によぎることが多くなった。

そんなある日の事だ。

俺はいつも通り、学校から帰宅し、兄貴を探すための用意をしていた。

服を着替え、懐中電灯の電池を入れ替えていた俺の目の前に突如、穴が開いた。

——何もない空間に。

そして、そこから黒いローブを纏った男が現れた。

男は言う。

「お前の兄が我々の世界を破滅させようとしている」

聞き間違いだろうと思ったが、「兄」という単語だけは理解できた。

信じたくはないが、他に兄貴に繋がる情報はないのでこの男の話信じざるしかないだろう。

——兄貴は別世界にいるのか？

とりあえず、兄貴が生きていることに俺は少し安心する。

が、問題なのはその後聞こえた「我々の世界を破滅させようとしている」の部分だ。

兄貴が別世界にいるという情報は百歩譲って認めてもいいが、こちらの方は認めたくはない。

兄貴は、誰の前でも優しく振舞う人間だったからだ。

「信じたくなければ、信じなくてもいいが——とりあえずお前にはこちらの世界に来てもらう」

いきなり男に腕をつかまれた。

そのまま穴に引きずり込もうとするのを俺は必死で抵抗する。

「違う、兄貴はそんな人間じゃない！ 兄貴は、俺を救ってくれた人間だ！」

俺の叫び声を通じたのか、男の手が止まった。

しかし、手を離そうとはしない。

どれだけ力を入れ、引き剥がそうとしても無理だった。

「お前の兄を連れ戻せるのはお前しかない。お前が行かなければお前の兄は一生戻ってくることはない。我々の世界も滅亡だ」

男は冷淡な口調で告げた。

「さあ、どうする」

俺が行かなければ、兄貴は一生帰ってこない……？

何でそんなことになっているんだよ——

いきなり告げられた運命に俺は混乱する。

ただ、ここで行かないと後で後悔するということだけはわかっていた。

「いいさ、行つてやるよ」

その瞬間、俺を掴んでいた腕が離れた。

どうやらもう、力ずくで入れるつもりはないらしい。

「では、我々の世界に歓迎しよう」

男は体を半回転させると、そのまま元来た穴の中に入ってしまっ

た。

見る見るうちに男が闇に溶け込み、見えなくなってしまう。

俺は、覚悟を決める。

自分で宣言した以上、もう戻ることは出来ない。

「兄貴、いやクソ兄貴。絶対にお前を別世界から連れ戻してやるからな！」

近所迷惑になるほどの大きな声で叫んだ俺はそのまま、全速力で穴の中へと飛び込んだ。

序章 『異世界からの案内人』（後書き）

やっぱシリアスな話は難しいですね……。
恐らく、当分は神に土下座は無いと思います。
最速でも10話ぐらいかな……。土下座。

第一章 第一話 『絶大的な力』（前書き）

文章力が足りない……！

第一章 第一話 『絶大的な力』

「ところでお前、名を何という」

いきなりローブの男に名前を聞かれた。

そこにわかみや
「外庭神也だ」

やはりか、と男は呟いた。

ちなみに現在、俺は長い長いトンネルのような穴の中を歩いている。

暗すぎて前がほとんど見えない。

「お前の兄はクロトという名だろう？」

「……………ああ」

そとにわくろと
外庭黒斗——正真正銘、俺の兄だ。

何故、兄の名を知っている　と問おうとしたが、すぐに問うまでもないことに気がつく。

兄貴は世界を破滅に導こうとしている人間だ。
悪名ぐらい知れ渡っていても不思議ではないだろう。

そんな事を考えていると強い憤りを覚えてきた。

——早く兄を止めないと。

「やめておけ。今のお前ではLv・1の勇者がいきなり魔王の城に乗り込んでいくようなものだ。この世界について何も分かっていないお前には兄まで辿り着く事は不可能だろう」

俺の心を見透かしたように男は言った。
確かにそうかもしれないがちょっと傷つくぞ。

「じゃあ、どうすればいいってんだよ」

「……本来なら、地道に経験を積んで頑張ってもらうところだが、我々も世界の命運が懸かっている。特例で世界の主からお前に力を授けるとのことだ」

「力？」

Lv・1からLv・99ぐらいまで一気に上げてくれるとかそんなものだろうか。

俺は少し期待してみる。

「絶大な攻撃力と絶対的な防御力……お前はどちらを選ぶ」

想像以上だった。

何これ、どっちを選んでもチート的な強さになるんじゃないか？
どうしよう、すげー悩むんだけど。

相手に隙を与えずに攻撃力でねじ伏せるか、
相手の攻撃を無力化して、隙を突いて倒すか。

普通に考えれば絶対的な防御力の方が良いだろう。

実際、こちらがダメージを受けることはなさそうだしな。

しかし、相手にこちらの攻撃が通用しない場合は別だ。

防御力が高くて、負ける可能性が低くなるだけで、勝てる確率はそう高くないと思える。

ならば、確実にダメージを与えられる絶大な攻撃力の方が必要だ。

「絶大的な攻撃力で」

俺がそう言った瞬間。

右腕に何かが入り込むかのような違和感を覚えた。

この感覚は……ハマる！ もう二度とこんな機会ないと思うけど。

違和感が治まったのを感じると俺は右腕に目を向ける。

……なんか右手の甲に紋章みたいな浮かんでるんですけどー。

これが攻撃力の正体か？ 何か力が湧いてきたって感じはしないんだが。

「今、お前の右手に浮かび上がった紋章は二つの効力をもたらした」
「効力？」

「1つは身体能力の大幅な底上げ。そしてもう1つは、お前に秘められていた能力の開放だ」

ほうほう、つまりは覚醒ね。

俺に秘められていた力の……って。

「そんなわけあるかああ！ 俺に秘められた力なんてあるはずないだろ！」

「あつたものは仕方ないだろうが」

まあ能力の開放については期待しないでおこつ。

身体能力が大幅に上がっただけでも感謝するか。

それから少し歩いていくと目の前に光が見えてきた。

——出口だ。

「ここから先は我々の世界だ。改めて聞くが覚悟はいいな？」

意思の再確認。

どうせ、ここで帰りたいといっても聞いてくれないだろうがな。
無論、帰るつもりはサラサラないが。

「ああ、勿論だ」

俺は決意をこめて出口へと踏み出す。

ここから先は異世界だ。

兄貴を救い出す旅が、今始まった。

第一章 第一話 『絶大的な力』（後書き）

ちなみに作者もこういう場面なら絶大的な攻撃力を選びます。

第一章 第二話 『始まりの街』（前書き）

うー……中々話が進まない……。

第一章 第二話 『始まりの街』

穴を通り抜けた先には、ファンタジーな世界が広がっていました。具体的に言っていると戦士や魔法使い的な格好の人が目の前を通り過ぎていくっていうね。

武器屋とかが並んでいるのを見ると、ここは街の中だろうか。

「ここが……兄貴の滅ぼそうとしている世界」

「始まりの街（ラグライン）」だ。数多くの伝説はこの場所から始まる」

パチッ

男が指を鳴らすと元来た穴が閉じた。

街行く人はそれを見ても少し驚くだけでそのまま通り過ぎていく。

「この世界には魔法というものがある。空間移動魔法なんてある程度の実力を持った者なら誰でも使えるから驚かれることはない」

「へえ、俺でも使えんのか？」

「素質があればな。お前は……」

男が俺の方に右手を向けた。

おそらく俺に素質があるかどうか調べているんだろう。

しばらくすると男は手を下ろし、少し口元を緩めた。

「お前に素質はない」

「マジすか」

まあでも。

この右手の紋章の力があるんだからそれ以上望むっていうのもお

かしいのかもしれない。

俺に秘められた力の正体は分らないが、いつかは目覚めてくれるだろう。

「で、俺はここからどうすればいいんだ」

俺は最大の疑問を男にぶつけた。

「まずは、パートナーを見つける。別に異性でなくてもいい。とりあえずそのギルドで冒険者登録パートナーをしておかないとこの街を出ることにすらできないからな。登録を終えたらここから西の方にある《神の塔》へと向かえ。途中でいくつか街を挟むが時間はあまり無駄にしないほうがいい。よけいな事に首を突っ込まずに直行しろ」

待て待て待て、頭の処理が追いつかねえ。

こいつこんな長い言葉よくすら言えんな。

「えーと、パートナー……は置いといて、まず《神の塔》ってのは何なんだ？」

「この世界に存在する4つの神の存在する場所だ。おそらくお前の兄は《神の塔》を巡り、そこに存在している神々から能力を奪い取るつもりだ」

「能力？」

「神は願いを叶えることが出来る。お前の兄は神々を力づくでねじ伏せて神の力を全て吸収するつもりだろう」

なんつー事を……。

つか兄貴は神さえもぶっ潰す力を持つてんのかよ！？

「で、何で俺までその《神の塔》まで行かないといけないんだ？」

「それは決まっているだろう。力を得るためだ」

目の前の男を殴り飛ばした。

数メートル先まで飛んだが、おそらく無傷だろう。

手ごたえを感じなかったからだ。

「勘違いするな。お前の兄の願いは神の力を奪うことであって、お前はただ力を得るためだ」

「どういう違いがあるんだよ」

「さっきお前に秘められていた力を解放してもらっただろう?」

「特に何も変化はないがな」

俺は右手の紋章を見る。

特に別段、特殊な能力が備わっているようには見受けられない。

「その変化がないことについてだが、どうやらお前の能力はまだ完全に解放されていないようだ」

「は?」

「それほどまでにお前の能力は嚴重にロックされているということだよ。世界の主が解いた封印はお前の能力にかけられていた最初の鎖しか断ち切ることが出来なかったらしい」

確かに、そういう話なら変化がないのにも頷ける。

世界の主……すっかりしてくれよ。

自分の世界の命運が懸かっているんじゃないのか。

「それで俺は神に封印を解いてもらいに行くってことが」
「そういうことだ」

つか、これ運が悪ければ兄貴と鉢合わせになるんじゃない?

恐らく今の俺では兄貴を止められないし。
ま……何にせよ、まずはパートナーを見つけることから始めないと。
とな。

「よし、目的地も分かったしパートナーを見つけにいくか」

「そうか、なら俺の役目も終わりだな」

「へ？」

男はいつの間にかまた空間に穴のようなものを作り出していた。
もしかして帰るつもりだろうか。

「俺はあくまで案内人だからな。用はもう済んでいる」

そのまま闇に消えていこうとする男に俺は最後に声をかけた。

「ここまでいた仲だ。名前を教えろ」

半分、体が闇に沈みこんでいたがおそらく聞こえているだろう。
実際、なんかこつちに手を振っているし。

「ゼクタⅡヴォームルス。異世界からの案内人だ」

言い終わった瞬間に穴は閉じた。

男はもう姿を見せない。

正真正銘、今の俺は1人だ。

「——さて、まずはパートナーを見つけるか」

俺は人混みを掻き分け、ギルドへと足を運ばせた。
どんな奴が俺のパートナーになるんだろうか。

とりあえず俺の希望は——美少女だ。

第一章 第二話 『始まりの街』（後書き）

兄貴マジばねえっす。

第一章 第三話 『鎖に繋がれた狼』（前書き）

神也君はこのままでも充分強いです。

第一章 第三話 『鎖に繋がれた狼』

俺は今、現在ギルドにいる。

周りにはなんかドワーフみたいにゴツイ人や剣を研いでいる人などがいた。

いずれにせよ彼らは何らかの防具を装備していて、

私服の俺はかなり浮いている。

本当に、場違いなぐらいのKY野郎に見えるほど俺は浮いている。とりあえず受付に言ってパートナーを見つけないんですけど、と言ったらいきなり周りの奴らに笑われた上、リストに出されたのはデブで調子乗ってそうな少年だった。

俺、なめられすぎじゃね？

▼ ▼ ▼ ▼

「確かに、こんな私服のガキがいきなり来られても困るだろーがよ
お」

俺は道端に転がっている石ころを蹴り飛ばしながら呟いた。

石ころは軽く蹴飛ばされただけでもかかわらず十数メートル先まで飛んでいく。

まあそんなことはどうでもいい。

何故、ギルドの外にいるかって？

そりゃ、居心地最悪だったからだよ。

周りの奴らは大爆笑、受付の人も失笑。

店の物でも壊せば証明できたかもしれないが生憎、弁償できる金は1円たりとも持っていないね。

そもそもこの世界の通貨は円じゃないか。

あの場で自分の力を証明できる術がなかったってことは俺は何だろう。

デブ少年とでもペア組んどけってことか？
神様の悪戯にしても酷すぎると思うんだが。

恐らくここからもう一度ギルドに戻っても笑い者にされるだけだろう。

別にギルドで探さなくてもこの街でパートナーを見つけ出せばいいだけだ。

外なら壊していいモノはいっぱいあるしな。
そこらへんの岩でも壊せばパートナー志望者が現れるはず。
もつとも、俺が望むのは美少女だが。

〜3時間後〜

「あーもう！ 何でみんな避けるんだよ！」

俺はパートナーを見つけることはなく、やはり1人だった。

正確に言いつと何人かは岩を素手で砕く俺に興味を持ってやってきたのだが、ことごとく美少女とはかけ離れた存在だったので追い払ってやった。

つか、本当に素手で岩を砕けるとは思わなかったんだけど。

絶大的な攻撃力は伊達じゃないな。

封印が解ければもっとすごいんだろうけど。

いつしか日は沈みかかっていた。

空の色で表すと夕焼けの朱色と夜の青の間ぐらい。

こんな時間になると宿屋が何かに泊まろうとするリッチな奴がチラホラと出てくる。

俺は金が無い〓宿屋に泊まれない〓野宿

変な等式が頭の中で浮び上がってきた。

しかも丁度いい具合に俺の真横には木々に囲まれた草原があるという。

「……………」

俺は悟ったように草原へと足を運ばせた。

本気で野宿しようかな、とか考えていたのだが、木々の隙間に見えたそれを見た瞬間にその考えは吹き飛んだ。

俺が見つめる先には鉄柱に身を預けるようにして眠っている少女がいる。

獣人——とでも言うべきだろうか、彼女の頭には何らかの動物の耳がついていた。

歳はおそらく14か15だろう。

俺の美少女センサーが反応する。

この反応……間違いない、あの娘は美少女だ。

木々の間を通り抜け、俺は少女の元へと向かおうとする。

しかし、後十メートルぐらいの所で俺の足は止まった。

不意に彼女の近くに男達が現れたのだ。

数にすると3人。

見た目は全員戦士だ。

「しかし、これが噂の「鎖に繋がれた狼」かよ。ほとんど人間だって聞いていたがこりゃロリじゃねえか。俺は熟したほうが好みだ

つつうのによお」

男の1人が前に出て少女の顔をまじまじと見つめる。
聞いて初めてわかったが、鉄柱から伸びている鎖で彼女の両手は封じられていた。

狼というのはあの耳のことだろうか。

「ボスの好みじゃないつーと、こいつどうします?」

「どうせ、鎖に繋がれていて何も出来やしねえ。てめえらで好きにしゃがれ」

「うつひょおう、まってましたボス!」

歡喜の声を上げる男の仲間の1人。

それを見たもうひとりの方が、

「このロリコンが」

と、小声で言っていたが男の仲間Aには聞こえなかったようだ。
彼はボスの横を通り抜け、少女の体へと触れようとする。

あれ? これなんかまずい展開じゃね?

助けに行ったほうが良いよね?

そこまできてやっと事の展開に気付いた俺は全速力で少女の下へと駆け寄る。

——が、男の指はすでに少女の体に触れようとしており、どう考えても間に合わない。

……はずだった。

男の指は少女に触れる直前で止まっていた。

原因は草原から飛び出た氷の針だ。

針は男の腹に深く突き刺さっている。

男は音も無く倒れた。

眠っていたはずの少女の目はいつの間にか開いている。

そして、残された男達に目を向け。

「あなた達は命が惜しい？」

刹那、男達の首元直前まで氷の針が迫っていた。

男達の顔が急激に青ざめる。

「……っちい！　ずらかるぞ！」

瞬く間に男達は俺の視界から消える。

残されたのは俺だけ……って残虐美少女がこっちを見ている！？

やべ、俺も狙われるかも。

反射的に顔をかばうように腕を組むがいつまで経っても氷の針は来ない。

俺は少し安心して顔を上げる。

「あなたは私にとって邪魔な人間？」

安心したのは無駄だったようだ。

だが、さっきの男達と同類にされていないだけ幸運だろう。

俺はそう、自分に言い聞かせ言い放った。

「俺はただの通りすがりの心優しい冒険者だ。単刀直入に言う、君をパートナーにしたい」

第一章 第三話 『鎖に繋がれた狼』（後書き）

狼ちゃんは容赦しません。

今の段階では神也君より強いよ！。

第一章 第四話 『素質はない』（前書き）

狼ちゃんと神也君はちよつと似ています。

第一章 第四話 『素質はない』

「パートナー？」

狼の耳を持つ少女は首をかしげた。

さきほどまでの殺気はすでに消えており、純粹に悩んでいるようだった。

「この街を出るために必要なんだ。俺ってほら、見た目こんな弱そうじゃん？ だからギルドでも相手にしてもらえなくてさ。よければパートナーになってくれないかなってー」

俺も實際何を言っているのか分からない。

でも何かここで失敗するともうパートナーは見つからないような気がした。

「私は……鎖に繋がれているから」

少女は戸惑いながら、哀しそうにうつむいた。

「そんな鎖、俺が何とかしてやるよ」

俺は笑いながら少女に近づく。

出来なくても、やってやろうと思う。

もう後戻りはできない、と俺は思ったのだが。

「近づかないで」

少女の声によって止められる。

いつの間にか、さきほどの男達と同じように首元まで氷の針が迫っていた。

「今までにも何人か、私の鎖を外そうと言ってくれた冒険者がいた。でも彼らには鎖を外す力など持ってなかった。それは私に近づく為だけの口実だったの」

「お前……」

俺は冷水でも浴びせられたように覚醒した。

そうだ。

今までこんな強い美少女をパートナーにしようとした奴はいたはずなんだ。

忘れていた。

「私の母は伝説の【氷狼】でね。神に匹敵するほどの力を持っているたの。そして、この世界は力こそが全て。全てを統べるためには力があるから。ねえ、あなたはこれが何を意味するか分かる？」

「……そりゃお前の母の取り合いになるだろうな。そんなに強いんなら味方につけたらかなりの戦力になるだろうし」

神に匹敵する力というからには相当強いんだろうと俺は思う。

だが、兄貴よりは弱いと思える。

兄貴は神をねじ伏せる程の力を持っているらしいからな。

「母は結局、どこの組織にも属さなかった。でも母がどこかに雇われるのを恐れた組織はある日、私を人質にして母をおびき出した」
「……………」

「私が入質じゃなかったら勝てたはずの戦いだっただのにね。10人や20人、一瞬で片がつくはずだったのに私の所為で抵抗できずに

殺された」

「じゃあ、お前がここにいるのは……」

「その後、私は捕らえられた。そりゃ伝説の【氷狼】の血を受け継いでいる子だもん。危険因子を放って置くわけにはいけないし」

何かこいつ、俺より重い過去を背負っている気がする。
嘘ついているようには見えないしな……。

「お前、それでここに繋がれていたのか」

「……この鎖には魔法に対する対策が施されていて、魔法では傷1つすらつけられないの」

魔法、この世界にはそれが存在していた。

確か素質があるものなら誰でも使えるっていうやつだ。
残念ながら俺に素質はないようだが。

「今まで私を助けようとした冒険者の中でも鎖に傷をつけることが出来た奴は1人もいない」

「あの2年前から私は……そしてこれからも繋がれたまま……」

彼女の目から1粒の涙が零れ落ちた。

絶対に抗えない現実への悲哀だろうか。

自分の力でも他人の力でも解けない鎖……。

全ての魔法が効かない絶対的な鎖……。

……全ての魔法が効かない？

俺は紋章の刻み込まれた右手を見る。

魔法は使えないが、絶対的な力を引き出す紋章。
俺は確信する。

「なんだ。やっぱいいけるじゃんか」

俺は首元に迫っていた氷の針を右手で砕く。
身体能力の大幅な底上げとか言っていたが、やはり一番能力的に
上がっていたのは攻撃力だ。

岩でも軽く壊せるこの力ならたぶん破壊は可能だ。

「……近づかないで」

またも少女が牽制の為の氷の針が俺に迫る。
今度は右足で根元から破壊した。

俺は2歩、3歩と少女との距離をつめる。
そして俺の右手が鎖に触れようとしたその時。

3方向から一気に氷の針が飛び出した。
やはりそれらは俺の首筋ギリギリで止まる。

恐らく俺がこのまま鎖を壊そうとすると彼女は俺を殺すだろう。
自分の運命に抗うのをやめて、彼女は罪を重ねるだろう。
誰かが希望を与え、その希望はすぐに朽ち果てる。
希望は絶望へと変わり、孤独な狼は抵抗をやめる。

俺は絶望からの脱出方法を知っていた。
かつて兄貴が俺を絶望から救い出してくれたから。
今度は俺が兄貴に代わって救い出す側に立つ。

「殺したいんなら今すぐ殺せよ。俺は絶対にお前を裏切らない、絶対に絶望から救い出してやる。こんな狭い牢獄なんか俺の手でぶち壊してやるから」

「……………」

少女は何か短い言葉を発した。

神也を狙う氷の針が瞬く間に地面に溶ける。

俺はそれを確認すると目の前の鎖に手を掛け、そのまま引き干切った。

バギン、という金属音が響き、少女を絶望に閉じ込めていた鎖が壊れる。

握っていた鎖の片割れを適当な場所に放り投げると、俺は下に座り込んでいる少女に手を差し伸べた。

「俺のパートナーになってくれないか？」

少女は頬を伝う涙を服の袖で拭うとコクン、とうなずいた。

第一章 第四話 『素質はない』（後書き）

予想通りの展開でしたね！。

ま、パートナーが出来たんで物語はやっと「外」へと突入しますよ
^^

第一章 第五話 『外へ出よう』（前書き）

後先考えずに文章を書くときよくわからなくなってくるね（黙

第一章 第五話 『外へ出よう』

あの後、俺は少女といっしょにギルドに来ていた。

彼女の名はクオリナと言うらしい。

なんとも彼女にあっている名前だと俺は思う。

ま、美少女なら名前なんて気にしないというのもあるかもしれないが。

そういえば俺が1人でギルドに来た時は笑い者にされていたのに今は何も聞こえない。

むしろみんな怯えているほどだ。

ん？ ああ、俺に怯えているんじゃない。

クオリナに怯えているんだ。

「さて、登録完了……と」

俺はクオリナと冒険者登録を済ませる。

人の視線は気にしない。

というか気にしたくない。

だってみんな、何でこんな弱そうな糞ガキが【氷狼】の娘を連れてんだ！ 的な殺気を放って来るんだもん。

「どうする？ 行くか？」

俺は隣にいるクオリナに話しかける。

一応ギルドに行く途中に俺の事情は話しているので今の意味は伝わっているはずだ。

「んー、待って」

「？」

クオリナを見ると、彼女は自分の服装をジーっと見ていた。
何か気になるのだろうか。

俺的には何を着ても可愛いと思うんだが。

「この服、2年間ずっと来てたまま……」

……そういうことか。

そりゃ2年も同じ服じゃ嫌だな。

第二次性長期も相まって一部分が窮屈そうだし。
つかこの辺に服売ってる所ってあんのかな？
防具を売ってる店はあったけどな……。

「あー、俺金持ってないんだけど？」

できれば買ってやろうかなーと思ったのだが、俺には残念ながら
金がない。

1円たりともだ。

いや、この世界の通貨は円じゃないと思うが。

しかしクオリナはそんな俺の言葉を聞いても特に気にせずにおも
むろに靴を脱ぎだした。

何をするんだ？　と思った瞬間にその疑問は一瞬で解決する。

持ち上げた靴の中から札やコインが何枚か出てきた。

「金については問題ないよ。だって私の前に現れた奴からたまに財
布を奪うしね」

脳内に氷の針で財布を出せと脅すクオリナが見えた。

気のせいだ。



1時間後、服を新調し、ついでにファーストフード店で食事を取った俺達は街の外に出るための門に向かっていた。

思ったんだが、クオリナは2年間何を食べて生きてきたのだろうか？結構気になるので後で聞いてみようと思う。

今はまだ過去を引きずっている状態だろうしな。

数分歩くと門が見えた。

門の両端には屈強な門番さんが警備している。

睨まれたら殺されそうな勢いの殺気を放っていたが、ギルドでもらった登録証を見せると案外簡単に通り抜けることができた。

「外には魔物がうろついているから気をつけるよボウヤ。もっともその嬢ちゃんに任せれば大抵生き延びれると思うけどな」

すれ違い様にそんなことを言われた。

クオリナの実力は知れ渡っていても俺はただの冒険者見習いだと思われているらしい。

少しこの門番を殴りたくなってきた。

もちろん、そんなことをすれば面倒くさい事になるのでやめておくが。

「やっぱり外の空気は気持ちいいねー」

クオリナは軽く伸びをしている。

門を通り抜けた先は草原が広がっていて新鮮な空気を直に感じる
ことが出来た。

俺自身も軽く伸びをしながらあの男——ゼクタの言っていたこ
とを思い出す。

西にある《神の塔》を目指せ。

兄に会うためのキーポイントであり、俺の強化フラグでもあるそ
の場所。

西門を通ってきたので方角的には真っ直ぐでいいと思うが……。
思うが……。

俺は前からこちらに向かってくるもの視界に捉えてしまった。

全長3mぐらいの熊、熊、熊。

3匹がこちらに向かって突進してくる。

速えよ、熊のくせにすげえ速えよ。

「たしかにこりゃ、クオリナに任せたほうが無難なのかもしれない
な……」

さっきの門番の話は案外当たっていたのかもしれない。

この熊さん達、殺意むき出しすぎじゃねー？

俺は静かにクオリナの後ろへと避難した。

クオリナは隠れる様に自分の背後に回った俺に気付いたが、

「あ、こんな雑魚、カミヤが手を出すまでもないってことで私にや
らせてくれるんだね！　ありがとー、久しぶりに両手を使って戦っ
てみたかったんだ」

何か少し勘違いをしてるが俺を守ってくれるならそれでいい。
あんな熊の攻撃、一撃でもくらったら病院行きだろうから。

俺は絶対的な攻撃力は持っていても、防御力は一般人レベルだから……な。

まったく、こんなヘタレで本当に兄を止めることはできるんだろうか？

俺はそんな事を考えたが、やはり俺はクオリナの後ろで怖気づくだけだった。

第一章 第五話 『外へ出よう』（後書き）

中々、新キャラが登場しませんねー。

神也君もいつになったら力を目覚めさせてくれるのか……。

あ、文章力低いですが評価や感想を書いてくださると嬉しいです。

第一章 第六話 『無理だと思ったら意外といけた』 (前書き)

人生何事もチャレンジです。

作者はあまり挑戦的ではないですが。

第一章 第六話 『無理だと思ったら意外といけた』

熊は一直線に俺達の元へと駆けて来ている。

俺はやはり怖気づいていた。

だって全長3mだし、怖いじゃん。

対してクオリナはまったく臆することもなく、むしろ余裕すぎる
とも言うような目で熊達を見ている。

その姿を見て俺は少し安心する。

「……【氷連針】」

クオリナが何か短く詠唱をした。

「グゴオアア」

——と、次の瞬間、熊がいきなり呻きだした。

3匹の熊の動きがほとんど静止する。

原因は、地面から連なって飛び出した氷の針。

針は正確に心臓を一突きしていたようで、熊はそれからまったく
動かなくなった。

「さすがー」

俺は純粹に彼女を褒め称える。

正直、俺よりも強いんじゃないか？

まだ俺は戦闘の経験はないが……。

「えー、こんなくらいで褒められても嬉しくないよ」

と、クオリナは言ったが、ちよつとモジモジしてるところを見ると内心は嬉しいようだ。

今まであんまり褒められた事がなかったんだろっか？

「本当にすごいよ。俺なんかじゃあんなの倒せないって」

「それは鎖を素手で壊した奴のセリフじゃないよ」

それもそうだ。

だが、3mの熊なんて普通、見たら怖すぎて倒せねえよ。

クオリナはそんな俺を見て、何を思ったか口笛を吹きだした。

軽快な音が草原に響き渡る。

俺が心地よくその音を聴いていると、途中から雑音が混じりだしてきた。

ドドドドドド、と口笛に混じって俺の耳に聞こえてくる。

そう、何か走り抜けるような音。

何かが、何か生き物が、草原にいる生き物が、魔物^{モンスター}が。

気が付くと、数十メートル先に巨大なトラみたいなモノが迫っていた。

「お前、何魔物呼んでんだこのやろおお!!」

「私がまだ小さかった頃に教えてもらったの。口笛を吹いて魔物を呼んで経験値を荒稼ぎしなさいってね」

「その技術はすげーけど、俺の前では使わないで下さい!」

「大丈夫だよ、カミヤは強いから」

そう言つてクオリナは微笑む。

ちくしょー、あれを俺が倒せてか？

さっきの熊よりも数倍ほど強そうだぞ!?

「ガチで無理だから、本当にガチで無理だから！」

抵抗も虚しく、俺はクオリナに押し出されるようにしてトラの直行ルートの前に立たされる。

どうやら彼女は助ける気は0のようだ。

「ほら、もう魔物はすぐそこまで来てるよ」

彼女に言われて気づく。

トラはすでに俺の5m程先まで迫っていた。

どう考えても避け切れそうにない。

このままジツとしておけば3秒後には楽になれるだろう。

もちろん、俺は兄を止められずに終わるわけだが。

俺としては、せめて兄に会うまでは死にたくないと思う。

それまでは何が何でも生き延びるしかないよな。

「うおおおおお！！！」

俺は玉砕覚悟でトラが俺に跳びかかるに合わせると、全力のアッパーカットを繰り出した。

俺の腕にトラの全重量が押し掛かる。

普通の人間ならここで腕が折れているかもしれない。

だが、身体能力の底上げ、攻撃力が大幅に強化された俺はそんな重量は枷にはならない。

むしろ、軽すぎるくらいだ――

バキバキ、と俺がアッパーを繰り出した所からそんな音が聞こえた。

瞬間、巨体が力に耐え切れなくなり宙に吹き飛ばされる。

——今の音、アゴの骨とかが砕けた音かなあ……。

俺はそんな事を考えているとクオリナが感心したように近寄ってきた。

「ほら、やっぱりカミヤは強いよ」

「正直死ぬかと思ったけどな」

俺はアッパーカットを繰り出した右拳を見る。

当たったのはほとんど偶然であり、なんとなく速度を予測してみた程度の単なる予想なのだ。

今、思い返してみると確実に当たるストレートの方が良かったかもしれない。

俺はため息を漏らした。

「んじゃ、《神の塔》目指していくぞー」

俺は目の前に倒れているトラを蹴り飛ばすと、西へと進みだした。クオリナも狼の耳をピョコピョコさせながらついて来る。

——日が落ちるまでに次の町に着けるかな……。

今にも日が落ちそうな空の下、とりあえず日にちをまたぐまでには辿り着きたいなーと思う俺だった。

第一章 第六話 『無理だと思ったら意外といけた』（後書き）

そういえば、饅頭を1年間熟成させようプロジェクトに挑戦しました。

賞味期限なんて気にしませんよー。

第一章 第七話 『パートナーの特権』（前書き）

ちよつと番外編気味の七話です。

作者の妄想力によって超速で更新しちゃいました。

第一章 第七話 『パートナーの特権』

歩くこと2時間。

日は沈んでいたが、何とか日をまたぐまでには行けたような気がする。

俺達は《神の塔》に行くルートの間にある「リギリス」という町に辿り着いたのだ。

正直、寄り道ばかりして疲れたので宿屋に行って即行で寝たい。

そう思って宿屋に来たのが5分前。

受付で何か手続きをして部屋に案内されたのが2分前。

俺が部屋に入り、ベッドに飛び込んだのが1分前。

てな訳で、俺は現在もベッドのいるのだが1つだけ1分前とは違う事がある。

この寝室には2つのベッドがあったはずだ。

1つはもちろん俺が寝ている。

だが、もう1つのベッドには誰もいなかった。

クオリナがいなくなった……という訳ではない。

俺は横倒れに寝ている自分の背後に何かもぞもぞしているモノがいるのに気付いていた。

まあ、状況を見れば何がいるのかは余裕で推測できるんだが。

問題なのは——どうしてこんな素適イベントが起きているかってことだ。

「クオリナ。何故俺のベッドの中に入ってきているんだ」

俺が彼女の名前を呼ぶと、もぞもぞと動いていたそれが止まった。

それは俺の耳元で小さく囁く。

「だめ？」

「いや、全然だめじゃないよ。むしろ大歓迎だけど」

つい反射的に答えてしまう。

後ろから言われたので顔は見えないが、今は上目遣いで少し困ったような表情だっただろう、と俺は勝手に妄想した。

というか俺はいつの間にこんなフラグを立てていたんだろう。

1つのベッドに2人入るといいうのは知りあつてから1日も経っていない男女では、ありえない事だ。

しかし、俺のそんな常識は一瞬で崩れ去った。

「今まで、寂しかったから――」

そして、俺の小さな疑問も解決した。

そういえばこの少女は2年前から1人だった。

上辺だけの暖かさじゃなくて、内側からの暖かさが欲しかったのかもしれない。

【氷狼】としての価値で掛けられる偽りの暖かさよりも母から受けていた本物の暖かさ。

気付けば俺は右手でクオリナの頭を撫でていた。

とても2年間鎖に繋がれていた者のモノとは思えない髪の高さに少し驚く。

ま、氷を溶かすことも出来るらしいから能力で髪を洗っていたんだろうけどさ。

「知ってる？ 狼は寂しいと死んじゃうんだよ？」

クオリナは自分の頭を撫でている俺の手を掴むと抱き枕のように両手を絡ませてきた。

妙な緊張感が生まれ、これってもはや√確定してるんじゃないかと考える。

腕に当たる柔らかな感触が俺の理性を掻き乱す。

案外、俺とクオリナは似ているのかもな……と俺は意識を腕から離れさせながら考えた。

「というか、狼じゃなくてウサギな」

むしろ狼は孤高であって一人前だろ、とか思いつつ俺は少し旅の目的を忘れそうになっていたことに気付く。

やべえ兄貴……、少し助けるの遅れるかも。

とりあえず今日は、謎の緊張感の所為で眠れそうにない。
いつの間にかクオリナは寝てるし、俺の腕に絡みつく彼女の腕は離れそうにないし……。

はあ……。

明日には《神の塔》まで辿り着きたい。

第一章 第七話 『パートナーの特権』（後書き）

いやー、正直うらやまs（黙

ちよつとムカツクので、2人には次回でちよつとした事件に巻き込まれてもらいましょうか。

どんな事件なんでしょうねー……フフフ。

第一章 第八話 『遭遇』（前書き）

神也は結構、後先考えずに行動します。

第一章 第八話 『遭遇』

昨日、あんなイベントが起きた所為か起きてみたら日本時間で1時だった。

本当なら8時には起きるつもりだったのになー……。

俺は半分眠り気味の体を無理やり動かしてベッドを出ようとするが、やけに右腕が重いことに気付く。

……こいつ、まだ俺の腕にしがみついたままだ。

「おーい、起きろクオリナー」

バシバシと彼女の肩の辺りを叩く。

すると「ギャンツ」という叫び声をあげてベッドから跳ね起きた。

「痛いよ力ミヤー」

その一言で思い出す。

そういえば俺は攻撃力がすごく高かった。

「あー悪い悪い」

俺は叩くのをやめ、窓から景色を眺める。

昨日は夜だったので人はほとんど見えなかったが、今日はここからでも多くの人が確認できる。

その多くの人混みの奥に、現実世界で見かけるようなレストランが存在していた。

やっぱこの世界にもあんな風にレストランがあるんだなー。

昨日はファーストフード店で食べたので、こういうものがあるの

は薄々感づいていたが。

俺はしばらくレストランを眺めていたがそこに張り紙が貼られていたのに気付いた。

貼り紙に書かれた文字……異世界の言語は分からないと思っていたが、俺はそれを見ているうちにその内容が頭の中に流れ込んでいく感覚がしてきた。

文字と頭の中に流れ込んでくる意味が同じなのは分からないが、おそらく予想するならば同じだろう。

右手の紋章が言語を理解できるような恩恵を授けてくれているのかもしれない。

あいつはそんなことは言っていなかったが。

そうでもなければ、そもそも昨日からクオリナを話せている時点でおかしい。

俺は自分でそう納得させておき、改めて頭に流れてきた内容を反芻する。

「現在、期間限定で超特大ヘヴンチョコレートパフェを実験販売中。30分以内に食べれば代金は無料です。研究材料が欲しいのでチャレンジしたい方はぜひ店内へ……」

要するに制限時間以内に食べ終わればタダな訳だ。

金欠な俺たちにとっては素晴らしい程の誘惑。

「？」

俺の小声が聞こえたのか、クオリナが俺の横に身を乗り出してきた。

そっぴや、こいつは2年間口クに食ってないんだよね……。

栄養失調にはなっていない様だから食事は少なからず取っていたよ

うだが――

ここで一気に食べてくれるだろうか？

「なあクオリナ」

「どうしたの？」

「超巨大パフェが無料で食べれるらしいんだけど行くか？」

▼ ▼ ▼ ▼

想像以上だった。

どうしようもない吐き気が俺を襲う。

フラフラとした動きで俺は机に倒れ伏した。

無論、原因は目の前にある天にも昇るような高さのパフェ。

見ただけでも2mはあるそのパフェに俺はすでに玉砕されていた。

「うー……」

ちなみに頼みの綱であつたクオリナも限界そうな顔で必死にパフェに食らいついている。

2年間の我慢はどうした。

今にも死にそうなクオリナを見て、俺はため息を漏らす。

「この調子じゃ無料食いは無理だな……」

「ぐにゅ、ま……まだ……」

「やめとけ、口からチョコ垂れてるし」

「ッ……」

残り時間は約7分。

それに対して残るパフェは1mもある。

どう考えても無理だ。

クオリナが大食いキャラであると俺は予想したのだが、彼女はむしろ少食派だったようで（それでも何故か俺より食べ進めている）パフェがなくなることはないだろう。

俺はどうしようもなくレジに目を向けた。

後、7分後にはあそこに行かなければならないのだ。

食べ終わらなければ通常通りの値段。

恐らく、今クオリナが持っている金を全部出して足りるかだろうかだろう。

というか足りたとしてもここから先どうすんのよ俺達。

「ん？」

と、そこで俺はレジの先にある出口——もとい入り口に怪しい男が駆け込んでくるのを見た。

怪しい男…… といつてもこの世界での普通は分からないのだが、何というか嫌な予感が頭の中によぎった。

そして俺の嫌な予感はすぐに的中する。

ドゴオオオオ、と男を追いかけるようにして入り口で爆発が起きた。

周囲のモノが焼け散り、男も容赦なく吹っ飛ぶ。
食事をしてきた客は事件に気付き、慌てて逃げようとするが場所が場所なので逃げられないようだ。

無論、俺達も爆発の余波を受け、テーブルの上にあったパフェが崩れ落ちた。

「何なの一体……？」

クオリナも入り口の爆発に気付き、そちらを見る。

もそり、と吹き飛ばされた男が立ち上がった。

だが、男はそこから駆け出そうとはしない。

男は観念した様子で真っ直ぐに揺らめく爆炎の先を見ていた。

「ここまでか……」

男が言うのと同時に、炎の中に人影が見えた。

数秒としないままにその姿は現れる。

「散々逃げてご苦労だったなア。でもよ、楽にしてやるからさっさとくたばれや」

どうやら俺は、よく分からない事件に遭遇してしまったようだ。

第一章 第八話 『遭遇』（後書き）

入れたいところまで入れられなかったな――……。――と、次回から本格バトル入ります。

第一章 第九話 『相性悪い……』 (前書き)

戦いつて書いてて楽しいですね。

第一章 第九話 『相性悪い……』

爆炎の中から出てきた男はそのまま怪しげな男に向かい歩き出す。体格はやや細身で、強気な口調とは対極的な位置にいるように見える。

「デュアラ……」

ポツリ、と男が呟いた。

その名前の主が笑みを漏らす。

「おお、俺の名前を知ってるとは、ずいぶん知れ渡っちまったなあ」

その名前を聞き、周りの客がざわざわと騒ぎ始めた。

嘘だろ、ついにここにも……？ など様々な言葉が飛び交う。

デュアラと呼ばれた爆発を起こした張本人はそれらの言葉を受け流しながら。

「そオだよ、俺が新人潰しで有名なデュアラ様だよオ」

新人潰し。

俺はその言葉に少し危機感を覚えた。

デュアラはそのまま男の前まで歩くと、いきなり胸倉を掴み上げた。

「ぐあ……」

男が小さく呻く。

「ギルドに登録してから6日で《神の塔》に行くための資格を手に入れた強さは認めてやるよ。だが《神の塔》をこの町で最初に攻略するのは俺だア。誰も先に行かせるわけにはいかねエんだよ。今の俺にはパートナーがいねエしなア。パートナーが見つかるまでの間は誰も行かせねエ……」

デュアラの右手に燃え盛る炎が灯される。

おそらくはこの場で消し炭にする気なのだろう。

何とかして止めたいが、あまりにも唐突な出来事に体が反応してくれない。

俺は自分の行動力の無さに悲観しながらその行く先を見る。

「そんなわけでさらばだア、ジーニス＝ローウィラン」

「……………ッ！」

勢いよく右手が振り下ろされる。

手に灯された炎が大きく弧を描き、目の前の男を焼き尽くす。ジユウ、と物体が溶けるような音が聞こえた。

瞬間的に俺は目を瞑っていたのでその時、どのような事が起きたかは分からない。

だが俺が目を開けた時、デュアラの炎は氷の壁によって防がれていた。

誰が？ どうやって？

「……………チッ」

デュアラは忌々しそうに突如出現した氷の壁を、右手の炎を振り回して溶かす。

そして一度だけ周りを見渡すと。

「……氷の壁か。粹な真似してくれるじゃねエかお嬢ちゃんよオ」

俺はハツとして横にいるクオリナを見る。

デュアラの目が彼女に向いているような気がしたからだ。

そして、彼女は現に『氷』を操る事ができる。

「罪の無い者に手を出さないでくれる？」

クオリナは床から数本の氷の針を出現させ、デュアラに突きつける。

彼女の声には強い意志と、少しの怯えが混じっていた。

デュアラはそれを読み取り、

「そうか、人が目の前で死んでいくのは嫌なんだなア？」

憎たらしい笑みを浮べ、炎を灯していない右足でジーニスを蹴り飛ばす。

最早、用無しとも言いたそうな顔でデュアラは瞬間的に両手に炎を灯した。

「だったらお嬢ちゃんから殺してやるよオ。その狼耳には心当たりがあるからなア……。後々厄介になる前に葬ったほうが楽ってものだアア！！」

デュアラの両手から50センチ弱の火の玉が生み出される。

直後、火の玉は俺達に向かって振り飛ばされた。

「……ッ!」

ようやく動くようになった足で俺とクオリナは隣の座席に飛び込んだ。

さっきまでいた座席が勢いよく燃える。

テーブルに倒れていたパフエは無残にも溶けていた。

「なんつー威力だよ……」

俺は思わず呟く。

魔法って凶悪だな……。

「もしかしてお嬢ちゃんの横にいる奴ってパートナーかア？ 羨ましいなア、俺にもパートナーを分けてくれよオ」

ボオオオ、とデュアラの右手に灯されている炎が不意に剣を形作った。

そしてそのままこちらに……駆け抜けてくる!?

避けようとするが座席の位置が悪く、隣は壁になっていた。

もう隣の座席に逃げ込むことは出来ない。

元々、俺達の席と入り口が結構近かった所為か、すでに剣はすぐそこまで迫っている。

「カミヤ！ 下がって!」

唐突にクオリナが両手を前に突き出した。

言われたまま俺は後ろに飛び退く。

すると次の瞬間、俺のいた場所にさっきの3倍の大きさはあるで

あろう氷の盾が出現した。

「小賢しい真似をするなア。でもよオ、炎が氷を溶かせないと思うかア？」

ザシユウウウウ。

炎剣は氷の盾をいとも容易く貫き、クオリナの頬を掠めた。それに続けるようにして、炎剣は貫きの動作をやめ、横薙ぎの姿勢に入った。

これは……マズいッ！

「終わりだア」

デュアラは横薙ぎに炎剣を振り払った。
濡れた紙を引き裂くように簡単に氷の壁は溶け、クオリナを真つ二つに切断——

——する前にギリギリ彼女を抱き抱えるようにして炎剣から逃れる。

「はぁ……はぁ……危ねえ」

俺は彼女を抱え、テーブルが少ないエリアまで駆け抜けた。
とりあえず、ピンチを乗り越えただけでも良しとするか……。

「さて、ここからどうするか……」
「カミヤ……」

クオリナが怯えたように呟いた。
彼女の頬からは血が垂れ、火傷も負っていた。

「ごめん……あいつと相性最悪だったのに喧嘩吹っかけるような真似をして……」

「……………大丈夫だ。俺もたぶん同じことをしようとしていた」

結局出来なかったけどな、とそれは心の中で呟き、俺は迫ってくる男を見つめた。

最初と違って体は自由に動く。

俺は怒りを言葉に乗せ、右拳を強く握り締めた。

「デュアラ……てめえ、人のパートナーを傷つけておいてタダで帰れると思うなよ」

この世界に来て、俺の初めての戦闘が始まった。

第一章 第九話 『相性悪い……』 (後書き)

ついに神也の戦闘が始まる……ッ!!

炎を操るデュアラを相手に神也に勝ち目はあるのか……!?
次回をお楽しみに！。

第一章 第十話 『相性不明!』（前書き）

たぶんこの話はチャットしながら書いてたのでaaaaaです。
マジすいません。

第一章 第十話 『相性不明!』

「ああ? 舐めた口聞いてツと焼殺しちまうぞオ」

「できるもんならやってみやがれ」

カチン。

相手の頭の中で何かが弾けたような感覚を感じた。

……と、次の瞬間怒りの形相をしたデュアラが俺に向かって馬鹿正直に炎剣を持って突っ込んでいく。

ただ、その速さはかなりのもので避けられないほどだった。

ま、もちろん普通の人間ならだが。

身体能力が底上げされている俺はいともたやすく炎剣を避ける。

ついでに避け際に肘打ちをヒットさせた。

「グ……」

デュアラの顔が苦痛に歪む。

体勢が悪かったのであまり力が入らない攻撃だったが、それでも紋章の加護によって攻撃力が大幅に上げられている俺の攻撃は相当のものだったようだ。

「はん、焼殺するんじゃないかったのか?」

俺はまたもや挑発する。

理由はただ単に相手を怒らせて攻撃の単調化を誘うためだ。

「……あんま調子のんなよオ」

デュアラはそのまま立ち上がると何やら両手を下に向けて静止する。

何をしているんだ？

もはや単調化通り越して固まってるし。

「来ないならこっちから行くぞ？」

姿勢を低くし、潜り込む様な形でデュアラに跳びこむ。

俺は勝利を確信した。

「にイ」

が、俺の拳がデュアラにぶち当たる直前。
気味の悪い笑みが目に映った。

「カミヤ、下ッ！！」

「え」

俺がそれを確認せずに体をひねらせた直後、炎の柱が床から噴出した。

この距離だと避けられない――

「ぐあああッ！！」

左肩が炎柱に巻き込まれ、焼けるように熱い痛みが広がる。

実際、焼かれているんだけど。

痛みに床をのたうち回る俺に、奴は近づいてきた。

「少しヒヤッとしたなア。俺が罫を仕掛けていなければ負けていたかもしれないア。まアどちらにせよ俺をヒヤッとさせた程度じゃ

勝てねエという事だ。そのままの意味でも、炎を操る俺は常にアツアツという意味でもだア」

「ちッ……」

俺は肩を抑えながら立ち上がる。

足元がおぼつかない。

「カミヤ」

「こっちに来るな……」

後援に来ようとしたクオリナを俺は止める。

相性が悪いのに無理して戦わせたくないからな……。

「いいねエ、パートナーいいねエ、そういうのを見ると益々殺したくなっちゃうよオオ！」

ドォンッ。

デュアラの両手の炎が弾丸のように打ち出された。
それをギリギリで俺は避ける。

「遅っせえんだよ！」

「……ならア」

不意にデュアラの両手の炎が混じり始めた。

炎は1つの大きな塊に形成されていく。

だが俺はそんなのに構ってやるつもりはない。

「先手必勝ッ！」

俺は近くのテーブルに置いてあった水入りのコップを手に取ると、

奴の炎塊に思いっきり振りかけた。

ジュワという音とともに蒸発した水によって辺りが一時的に曇る。その一瞬の隙を俺は逃さない。

「ッ!？」

「終わりだ糞野郎」

デュアラは炎塊を投げつけようとするが、俺の方が断然早い。俺は懷に飛び込むような形で駆けぬけ、渾身の力を込めた拳は、一直線に奴の顔面を捉えた。

「その程度の力で俺に勝とうと思ったのが間違いだったな」

俺は奴が倒れるのを見て、呟く。

数秒後、俺も床に倒れていたのだが。

第一章 第十話 『相性不明!』 (後書き)

神也君、早く神を土下座させて下さい。
展開遅すぎです。

第一章 第十一話 『灰色の傍観者』（前書き）

やっと物語が始まってきたような気がします。
土下座はいつになるのかねえ……。

第一章 第十一話 『灰色の傍観者』

俺は今、治癒魔法とやらで治療してもらっている。

焼けた左肩が再生していくのが目に見えて分かった。

横たわる俺の視線の直線上にはかろうじて顔の形を保っているデユアラの姿があった。

もちろん俺がやった事だ。

あちらの方も一応治療はされているみたいだが生きているかはよく分からない。

「痛う……」

痛みの広がる左腕を極力使わないように右腕で起き上がる。

横にいるクオリナが動かないでと、言ってきたが俺はそんな事は聞いていなかった。

誰かがこちらに歩いてくる。

治療を行ってくれている人の制止を無視し、俺は引き付けられるようにそいつの前に立った。

灰色の髪に翡翠色の目。

身長は同じぐらい、年齢は俺より少し上かもしかしたら同じかもしれない。

「何のようだ」

「別になんてことはねえよ、ここら一帯を占める賊を殴り潰した新人がいるってもんで見に來ただけだか？」

「嘘だな」

「何故そう思う」

「だってお前、店の外から観戦してたじゃん」

チツ、見られてたか、とそいつは舌打ちする。

実際、パフェを食べている途中にたまたま目に入っただけなので合っているという確証は無かったがどうやら合っていたらしい。

「で、何のようなの？」

「まあそう焦るな。俺は何つーか裏で動く便利屋とでもやっててな、上の命令でテメエを監視してんだ」

「よーするように？」

「テメエの兄からの遣いだよ、あの糞野郎のな」

吐き出すようにそいつは言った。

というかこいついきなり重大発言をしてきたような気がするぞ。

兄貴？ あの兄貴からの遣い……？

「つーことは、兄貴は俺がこの世界に来たことを知っているのか」

「当たり前だろーが」

「それじゃ、お前は俺を始末しにきたのか？ どうせ兄貴は俺が止めようとしていることぐらい分かってるんだろ？」

「だから監視してるだけだっつってんだろーが。……奴はテメエに早く会いたがつてるそうだがな」

「

パシッ

俺に向けて何かが投げられた。

それは比較的小さなカードだった。

「これは？」

「《神の塔》に入るための資格を示すカードだ。通常、一定の成果やB級以上の依頼をこなさないともらえないものだが特別にテメエにくれてやる。」

「……《神の塔》ね」

「ま、精々頑張ることだな」

それを言い終わるとそいつは周囲の人混みに紛れて消え去ってしまった。

しかし、何だかよく分からないが結構大変な事になってるようだ。特にもう兄貴に俺の存在がばれてるってことが。これは……急いだほうがいいかもしれない。

いつの間にかクオリナが俺の傍に移動していた。どうやら俺の近くにいないと安心できないようだ……。とはいえ、むしろ来てくれたのは好都合だったので俺は彼女の頭に手を乗せると、

「行くぞクオリナ。俺の為に協力してくれ」

「え、でもまだ肩が……」

「こんくらいもう大丈夫だ。もうほとんど治ってるさ」

それを証明するために左肩を大きく振ってみる。

あ、やべっメチャクチャ痛え。

自然と顔が苦痛に歪む。

俺はどう見ても痛がつているようにしか見えない顔を無理やり笑みに変えたが、もちろん彼女は気付いていたようで、

「やっぱり治療、続けてもらおうよ」

「……そうする」

《神の塔》に行けるのはいつなんだろう……と、俺はため息をついた。

▼ ▼ ▼ ▼

「どうだ、弟の様子は？」

無機質な声が室内に響き渡る。

広い広い部屋の中、外庭黒斗は何かそこにわくろとに語りかけた。
少なくとも人ではない何か。

そして人ではない何かは応答する。

「現在、「リグリス」に滞在中。行動、所持しテイるカードから察
すルに西の《神の塔》二向かう様子デス」

「それだけ分かれば十分だ」

そして黒斗は笑う。

自らの弟を嘲笑う。

「俺を止められるもんなら止めてみる。てめえみたいな出来損ない
の愚弟じゃ一生俺に辿り着けないだろうがなあ！」

当然、神也にその声が聞こえるはずは無いのだが、彼は構わず叫
んだ。

やがてその声は静まり、再び室内は沈黙に染まる。
彼の計画はまだ、始まったばかりだ。

第一章 第十一話 『灰色の傍観者』（後書き）

黒斗が初登場ですね！

人ではない何かって何なんでしょうね？

ま、適当に予想しておいて下さい。

恐らく答えが出るのはだいぶ先ですが……。

第一章 第十二話 『神の塔』（前書き）

やっと《神の塔》に突入しましたね！。
死亡フラグには注意ですぜ！。

第一章 第十二話 『神の塔』

「ここが……《神の塔》」

「私も見たことは何回があるけど実際に入るのは初めて……」

「リグリス」を出発した俺達はまたもや何時間か歩き続けた後、ようやく《神の塔》に辿り着いた。

……うわぁ、なんか天まで届きそうな高さなんですけどー。

俺は果てしなく絶望する。

というか塔の中にただならぬ邪気を感じるんだが、これは死亡フラグじゃないよな？

「……と、あの門番に資格を見せればいいんだよな」

俺達は塔の入り口に立っている門番に灰髪の奴からもらったカードを見せる。

一瞬このカードが偽者だったらどうしようかと思ったが心配するまでも無かったようで快く彼らは門を開けてくれた。

門を通り際に門番はこんなことを言った。

「君達若いのに頑張るねー。やっぱり神に会いに来たクチかい？
ま、資格もあることだし実力は認めてあげるけど、精々魔獣に食い殺されないようにね」

「「え？」」

ガシャンッ

無情にも門は閉められる。

「魔獣って……あの、アレ？」

「アレというか本物っぽいよね」

やべ、体が震えてきたんだけど。
食い殺されるってなんですか。

気を取り直して辺りを見回す。

塔の中は簡素なもので、構造は壁に沿って螺旋階段が続いている
だけだった。

階段を上る途中にはいくつか部屋が見えるが避けて通っても問題
は無いと思う。

ただ、やはり問題なのは……。

「グガオオオオオッ！！」

まるで螺旋階段を塞ぐように魔獣が突っ立っていたことだ。

「何、あの血色の悪そうな青いライオン」

「B級の依頼に出てくる魔獣だね、母が秒殺しているのを見たこと
があるよ」

「秒殺……。でもB級ってでも俺らにはきつくないのか？」

たしか資格がもらえるのもB級以上の依頼が条件のはず。

ということはこの病的ライオンもそれなりに強いはずって――

「何かライオン口になんかエネルギー的なモノを溜めてるんだけどお
おお！？」

「大丈夫だよ」

「大丈夫って何がッ！？」

病的ライオンの口から青い光線みたいなものが発射された。恐るべき速度で放たれた光線は一直線に俺達の方に向かう。終わった、いきなりフラグ回収かよ。

——と思ったが光線が俺達に当たる事は無かった。

見ると、光線はクオリナの右手一本で止められていた。

——いや、正確に言うとう光線は凍らされていた。

「水の性質を持つ魔法なら凍らせられるからね」

クオリナが自信満々に言った。

俺はすごいパートナーを手に入れてしまったのかもな……。

根元から凍らされた光線は病的ライオンの口まで届き、凍らされていた。

「カミヤ、今のうちにアレをぶっ潰しちゃって」

「え、……あつ、ああ」

俺は病的ライオンの真横に立ち、思いっきりそのわき腹にストリートをぶち込んだ。

何か内臓や骨が潰れる音が聞こえた後、その巨体は塔の壁へとぶっ飛んだ。

確認するまでもない、終わった。

死体の横を通り過ぎ、螺旋階段に進む。

クオリナは何故か病的ライオンの遺体を覗き込んでいた。

「痙攣してる……？」

見ると、病的ライオンの体は確かに痙攣していた。
カエルを使うあの実験みたいなもんだろうか？

「電気も流れてないのになんで痙攣してんだろうな？　もしかして
DMで死んでもなお興奮してるとか」

「それはない」

「やつぱり？　……ま、気にせず行こうぜ。死体覗き込むなんて気
持ち悪いからな」

クオリナはまだ何かを考えていたみたいだが俺は彼女の手をとつ
て階段を上がっていく。

一体、どのくらい上ればいいんだろうと俺は上を見てみた。

今の騒ぎで出てきたのか、階段から繋がるいくつかの部屋から魔
獣が顔を出していた。

「……こりゃ骨が折れるな」

神までの道のりはまだ長そうだ。

というか辿り着いたとしても体力残ってんのか……？

第一章 第十二話 『神の塔』（後書き）

次回、やっと神とご対面？
つーか痙攣ってなんすかw
まさかなんかの伏s（消

第一章 第十三話 『VS水神』（前書き）

相変わらずのgggd小説です。

書いてる作者にも展開が読めません。

第一章 第十三話 『VS水神』

螺旋状の階段は異様に長く、緩やかな段差の為に頂上まで上るまでには相当な体力を使った。

そして途中で出会った魔獣達を蹴散らし、死ぬほど疲れた俺達の前には現れたのは。

恐らくは神。

屋上に出た俺達を待ち受けていたのは人の形こそしているがその背には水のようなもので模られた翼が生えていた。

もっともそれは完全なモノではなく片方の翼は根元からもぎ取られていたのだが。

神は無表情で佇んでいるが心なしかその顔からは苦痛が読み取れたような気がした。

誰がやったのか。

そんな事は大体分かる。

だが、まあ心配してやる気はない。

何故ならその後、神は俺達に挑発を掛けて来たからだ。

「人間、主の望むものを手に入れたければ、まずはこの水神^{わたし}をひざまずかせてみるがいい」

挑発には当然乗る。

出来れば話し合いで済ませたかったのだが、バトル展開になるのが王道なのだろう。

そう、俺がこの選択をとった瞬間に戦いは始まったのだ。



「いいぜ、神様おまえがそれを望むってんなら今すぐ土下座させてやるよ」

俺は指の関節を鳴らしながら神に語りかけた。
遅れてやってきたクオリナも、

「何かよく分かんないけどカミヤがそうさせたいんなら私も頑張るよ」

と、小さくガッツポーズをして意気込んでいた。

「ふむ、威勢は良いが、所詮はただの冒険者。果たして何秒持つかな」

「さあ？ でも暇つぶしにはなるだろ」

俺は地を蹴り、一直線に神の下へと飛び込んだ。
勢いで加速した俺の右フックは虚しくも空を切る。

「速度は中々だが。それでは忌々しきあの男の足元にも及ばないな」
「……ちッ」

神の両腕が俺の方向へと向けられた。

俺が何かを考えた瞬間。

まるでかめ〇め波のごとくその手の内から光線を射出した。

「クオリナッ！」

「言われなくても初めからそうするつもりだったんだけどー」

光線が一瞬にして凍る。

もちろん原因はクオリナだ。

割り込んで入ってきたクオリナの手が光線を凍らせた。

神の表情が少し歪んだ。

凍らされるのが予想外だったのだろうか。

「ちなみに言うけどお前のその光線は二番煎じだからな。病的ライオンが先だ」

「そうかい。ま、今は小手調べだ」

神の右手が横向きになぎ払われた。

——と、その軌跡から散弾のように複数の水の弾丸が飛び出した。

先ほどの光線よりは随分と遅い。

俺は一步で当たらない場所に避ける。

これもまだ小手調べなのか？ と俺は疑問符を浮かべたが、どうやらこれはもう小手調べじゃなかったらしい。

「うほ……」

気付けば脇腹から血が滲み出していた。

避けたはずの弾丸が当たっていたのだ。

クオリナについても例外はなく、彼女も左腕を押さえている。

「何故……」

神は答える。

「何故？ こんなもの神でなくても使える魔法だ。ただ空中で再び

分裂させただけだ」

「つまりはクラスターボムみたいなもんってことか」

「くらすたーぼむ？」

クオリナが首をかしげた。

この状況なのに不思議そうにしている彼女に萌えた。

「空中で……まあ分裂する爆弾だよ」

細かい仕組みはよく分からないし、教えてもあんまり意味が無い
と思ったので簡単に説明する。

そんな俺の話を神も聞いていたようで

「そのような兵器は聞いたことがないな。主はこの世界の人間なのか？」

「違うよ、俺は異世界からやってきた英雄だ」

神の懷にもぐりこむように地を蹴る。

今度は神の手にも注意しながらだ。

「届かないな」

ゴボオオオオオオオオ

神の片翼がみるみる内に姿を変えた。

唸りを上げ、それは意思を持って動き出す。

「翼が……龍になった？」

俺が神に到達する前に龍はその巨躯な体で俺に体当たりをぶちか
ます。

ガードなんて考えている暇は無かった。

「がはアッ」

俺の体が数メートル先、空と屋上を隔てる壁にぶち当たる。

壁を突き抜けるほどの威力だったら俺は大空からパラシュート無しのスカイダイビングだった。

つか、なんかものすごい背中痛いけど、骨とか折れてないよね。

更に龍はとどまる事を知らず、その勢いでクオリナの方に旋回する。

彼女にぶち当たったとしても凍らされるのが落ちだろうと思ったのだが、俺の考えは甘かったようだ。

「凍らせられない……ッ!？」

ドゴオオオオオ

彼女の華奢な体がクの字に曲がり、吹き飛ばされる。

普通の人間なら死ぬ一撃。

だが彼女は直前に氷の壁を展開していたようで生身の体でも耐えることが出来たようだ。

「ぐうう……」

倒れこむ俺達に神はつまらなさそうな顔で言った。

「そういえばあの男も異世界からやって来たと言っていたな。そして主はあの男の知り合いだろう？ 奴は言っていた。もう一人この世界にイレギュラーが現れた……と。ならば主を始末しよう、遠まわしにはなるがそれが奴に対する仕返しになるだろう——」

神は俺の前に立った。

「そんな訳だ。個人的な都合で悪いが死んでくれ」

神の片翼が大きく唸りを上げる。

「カミヤツ！ 避けて！」

「だめだ、避けられそうにな——ッ！？」

翼は咆哮をあげ、龍へと姿を変える。

次の攻撃をくれば死ぬ事は分かっていた。

それでも体は攻撃の速度についていく事ができない。

倒れたままの俺に避けられるはずも無い一撃がぶち込まれた。

第一章 第十三話 『VS水神』（後書き）

水神がチートってますねw

片翼ぶっ潰されてんのに余裕の表情とかww

さて、ここからどういう展開になるんだろうか（黙

第一章 第十四話 『第一覚醒』（前書き）

おや、神也の様子が……？

第一章 第十四話 『第一覚醒』

轟音が辺りに響き渡る。

龍が俺に激突したのだ。

避けられない速度だった。

かろうじて両手でガードするのが精一杯。

「うぐあアアアアアッ!!」

絶叫。

痛みによる叫び。

ただし、俺が叫んだわけじゃない。

神が叫んでいたのだ。

だが龍は確かに俺に激突した。

避けられるはずも無く、両腕で防ぐ事しかできなかった。

それなのに俺の体にはまるで痛みは無い。

何故か。

「主……一体私に何をした!!」

「何って……別に」

が、そこで俺は気付いた。

今もなお攻撃を受け止め続けている両手。

右手の甲に刻まれた紋章が龍の一撃を受け止めていたのだ。

同時に何故、神がダメージを受けているのも理解した。

原因はその紋章から放たれていた電撃だ。

水は電気を通す、ゆえに神の身体に伝わったのだ。

「雷属性だと……？ 何故滅ぼされたはずの魔法を――。いや、それよりも何故私の魔法無効化が効かない！？」

「……滅ぼされたはずの魔法？」

雷属性。

よく分らないが今はもう存在していない属性らしい。

つかそんなものが何故俺に？

その前に俺、才能が無いから魔法は使えないはずじゃ……。

「たしか……雷属性は100年ほど前に属性を司る神が消えたことによつて存在しなくなつたはず……」

クオリナが震える身体を支えて立ち上がった。

「神が消えた？」

「うん……。いきなりこの世界から消えたの」

「厳密に言つと存在を喰われたのだがな。……ともかく、雷属性にしても私の魔法無効化を更に無効化するなんてものはかつてその神が扱っていた魔法以外にないのだがな」

俺は黙りこくるだけだった。

話しについていけない。

神が存在を喰われた？

神にしか破ることが出来ない魔法無効化を俺が破つた？

「神が扱う魔法、それらは特別な魔法として《神術》と呼ばれる。かつて雷神だった奴は《神雷》を操る唯一無二の存在だ。……それ

を何故主が扱える！」

———「どうやらお前の能力はまだ完全に解放されていないようだ。」

———「世界の主が解いた封印はお前の能力にかけられていた最初の鎖しか断ち切ることが出来なかったらしい」

あの男の言葉が蘇る。

最初の鎖は断ち切ったと言っていた。

となるとこれが……この《神雷》とか呼ばれているこれが俺の能力なのか！？

「は……はは」

俺の口から静かに笑みが漏れた。

確かにこれは絶大な攻撃力だ。

神にしか破れない無効化を俺の《神雷》が突き抜けた。

さらに、それはまだ第一段階だ。

これが最終段階までいくとどうなるか……考えただけでワクワクするね。

「クオリナ」

「？」

俺は少し遠くにいたクオリナに指差す。

「一気に奴を潰すぞ。相手は元よりダメージが蓄積している。相性も抜群。問題は防御力だが……まあ何とかなるだろ」

彼女も1つはあ……とため息をもらすと、

「神に勝つ気でいるなんて……。」

「駄目なのか？」

「いや、私も本気を出さないといけないかなーと思っただけ」

そして何故か空気を読み、攻撃をして来なかった神もついに動き出した。

なんか目がマジモードになってらっしゃってるのですが。

「ふむ……少々取り乱したが《神術》とはいえ、使用者は人間。その程度の力で神に挑もうなどという甘い考えをぶち壊してやろう」
「——などとはざいている神の甘い考えこそを俺はぶち壊そうと思う」

ドッ！ と神の神の翼が龍に変化する。

更に神の右腕からも水龍が飛び出した。

恐らくはこれが奴の現在での本気なのだろう。

ここから本当の戦いが始まる。

第一章 第十四話 『第一覚醒』（後書き）

長引かせたくて長引かせてるんじゃないんですけどね……。
ともかく、次が決戦ですよ！。

第一章 第十五話 『鉄拳炸裂』（前書き）

神也君の攻撃の絶大さが伝わりません。

第一章 第十五話 『鉄拳炸裂』

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

砲弾のように俺は飛び出す。

飛んで来る龍の攻撃を避け、まずはボディブロー。

……がその攻撃はもう一匹の龍によって防がれる。

「ぐ……」

神がうめく。

当然だ、今の俺は《神雷》を操れるらしいからな。

龍の体内を通り神にも電流が伝わる。

その瞬間、俺の体は蹴りで吹っ飛ばされたがな。

だがそれも計算通りだ。

グサッ

クオリナの出現させた氷の針が容赦なく神を貫く。

「……コンビネーションは中々だが。その程度では私に深手を負わせる事は不可能だ」

どうやら水の結界か何かを展開していたらしい。

あまり傷は負っていない、となると次の行動は……。

「大丈夫、本命はこつちだから」

「へ？」

思わず漏れた声は俺のものなのか神のものなのか。
気付けば奴の頭上には巨大な氷の刃が降り注いでいた。

「ちィ！」

神が回避に移る。

しかし気づいた時には少し遅い。

避けきれずに神の左腕が切り落とされる。

「がアアアア！！」

「……ん！？」

神は突如翼が変化したほうの龍を爆散させた。

莫大な力が辺りに広がる。

俺はおるか、クオリナまでもが吹っ飛ばされた。

……ッ！！　　っーか不味い。

このまま吹っ飛んでいくと塔の外にスカイダイビング直行じゃね
ーか！

とか思っていたら氷の壁に受け止められた。

クオリナだ。

だがもう気力はほとんど残っていないらしく、立ち上がるという
動作する出来ないようだ。

俺も体のあちこちがズキズキと痛む。

これ以上無理をすると体がバラバラになりそうだ。

「と……なると、次で決める！」

「人間風情が神に勝てると思うなアアア！」

完全に逆ギレしてるよコイツ。

俺は全身全霊の力を右手に込める。
狙うは奴の顔面。

龍の動きを正確に読み取り、回避する。

「へ、翼を爆散させたの……間違いだったんじゃないの?」

神の攻撃を全て避けながら笑う。

「甘いな」

「? どういう……」

俺がその意味を考える前にそれは起こる。
神の左腕からも龍が飛び出したのだ。

「馬鹿な、さっきはまだ全力じゃなかったのか!？」

「主よ、切り札というものは 最後まで取っておく事なんだよ!」

龍一匹だけでも避けるのが大変なのにこの状況で2匹投入って――

――一匹になっていたからって油断してた……。

「終わりだ人間」

ドゴオオオン、

辺りに響き渡る破碎音。

あんなものに潰されたら人間ではまず命はない。

戦場に静けさが漂う。

2匹の龍が潰した地には何も残ってはいない。

「……終わったか。さすがに連戦となると神にもキツイものがあったが……、所詮は少し特別なだけのく人間>だったな。自身の能力に過信してなければこんな運命にはならなかっただろうに」

神はそのまま眠るように目を閉じる。

が、その目は数秒としないままにまた開いた。
理由は、突然奴の上から声が聞こえたからだ。
誰がつて？ もちろん俺のさ。

「油断大敵、少し警戒すれば気付いたかもしれないのにな。自信の能力を過信してるのはお前なんじゃないのか？」
「空からだとツ……！？」

刹那、メキツという音が神の頬から発せられる。
俺の拳が顔面にめり込んだからだ。
そのままの勢いで神は吹き飛ぶ。
何回か床にバウンドした後、その体は止まった。

神は動かない。

つまり、俺の勝利だった。

第一章 第十五話 『鉄拳炸裂』 (後書き)

水神がなんか哀れに見えてきたね。

第一章 第十六話 『神？ ああ、俺の前で土下座してるよ』（前書き）

新小説『僕は順位に流されない』を書き始めました。
こっちの方もよければ見てくれると嬉しいです。
では、タイトル通りで土下座な十六話をどうぞ。

第一章 第十六話 『神？ ああ、俺の前で土下座してるよ』

「……く」

水神がゆつくりと起き上がる。

どうやら目を覚ましたみたいだった。

「よーす、神様。人間に負けた気持ちはどうだ？」

「……………主か」

神の象徴ともいえた翼は既に両翼とも根元から無くなっていた。
片翼は俺の兄貴の力で、もう片翼は自身の手で爆散させたからだ。

「そうか、私は負けたのだな」

「いやー。まだ負けたわけじゃないと思うぜ？」

「何故だ？」

それは、と俺が言おうとしたところでクオリナに横槍を入れられた。

「それは、カミヤがまだ土下座をさせていないからだよねー」

「……………ッー!!」

まずはこの水神^{わたし}をひざまずかせてみるがいい。

水神^{こいつ}が自分自身でいった言葉だ。

なんか大分動揺してるが……………、戦闘中に見せた威勢はどうした。

「そついう訳だ。さあ土下座をしてもらおうか」

俺は右手の紋章からバチバチと《神雷》を放出する。

どうやら俺は自在に能力ちからを操れるようになったようだ。

「ま、まで。その前に1つだけ主に聞きたいことがある」

「何だ？」

「あの時、私が最後の一撃を放ったあの状況で……どうやって上空に逃れることができたんだ？」

「……ああその事か」

俺は傍にいるクオリナに合図を送る。

まだ俺達はあまりパートナーとしての時間は立っていないが、事実上はもう以心伝心レベルの絆に達しているといえるだろう。

「ッ!？」

と、俺の立っていたその場所が上に持ち上がる。

——クオリナの氷の壁だ。

下から突き出すように現れる氷の壁は俺を乗せて5mぐらいの高さまで上がった。

これが答トリックえだ。

「ま、簡単に言うところいう事だ、つーかよくこんなのに気付かなかったな」

「……神っていつでも案外馬鹿なんだね」

グサッ

何かが神の体を貫いたような気がした。

「……仕方あるまい。もともと私が言い出したことだしな」

神は両手を床に付き、ぐぐつと身を屈めると、頭を沈めた。

これはもう完全なる土下座だ、ははは、我ながら見てて爽快だ。

俺はクオリナを横目で見る。

さぞかし彼女も内心笑ってるんだろーなーとか思ってみたら、クオリナは本当に嘲笑うかのような表情で笑っていた。

黒い……どす黒いぞ……。

「それで、望みは何なんだ……？」

そんなもの初めから決まっている。
兄貴を救うための力を得るためだ。

「この右手の能力を解放してほしい」

俺は未だにバチバチと音をたてる右腕を突き出す。

神はやはりか、といった様子で、

「ふむ……5重の鎖か。といっても最初の封印は解けているようだがな。……主よ、1つ聞くが、主は何のために力を得ようとするのだ。護るためか？ それとも殺すためなのか？」

さりげなく神が俺に聞いてきた。

そんなもの初めから分かりきっているというのに。

「護るためでも殺すためでもない。救うためだ」

「……そうか」

神がそう呟いた瞬間、俺の右手が爆発したかのように雷鳴を轟か

せた。

封印の解除が終わったのだ。

何秒かすると電撃は俺の右手にすんなりと収まる。

これでまた1歩、兄に近づいたんだよな……？

「……ところでこの土下座はいつまで続けていればいいんだ？」

「ってまだやってたのかよッ！？」

▼▼▼▼

とある町の裏路地。

誰も通らないような薄汚れた道に彼らの居住地^{アシト}へ繋がる入り口がある。

「一応表にも玄関はあるのだが、襲撃^{………}される恐れがあるため裏道^{………}を使っているのだ。」

ガチャ

裏玄関のドアノブが回される。

そのまま滑り込むようにして人が中に入っていた。

「おかえり、シグマ様ー」

帰宅直後のシグマに可愛らしい声が飛び込んでくる。

13, 4ぐらいの少女が玄関に待ち受けていたのだ。

シグマは駆け寄ってこようとする少女を片手で押さえつけ、

「……糞野郎の弟に会ってきた」

「え？　そ、それって禁止されてるはずじゃ……」

「別に破った所でどうってこともない」

シグマはポケットに突っ込んでいた紙を取り出し、切り捨てるように破く。

表面から見える文字を見るに、何かの契約書のようなだった。

完全に元が見えなくなるぐらいに破いた後、シグマは吐き捨てるように言った。

「俺はあの糞野郎が気に食わねえからな」

第一章 第十六話 『神？ ああ、俺の前で土下座してるよ』（後書き）

ここから新展開に……なるのかな？

あ、一応言つときますけどシグマは主要人物の1人です。

普通に物語に絡むんでよろしく！。

第一章 第特話 『これまでのあらすじ』第二章 風神編のお知らせ『(前書き

今までのあらすじとか。

第一章 第特話 『これまでのあらすじ』第二章 風神編のお知らせ

「これまでのあらすじを分かりやすく紹介しろ？　こっちは時間が無いっていうのにいきなり何を……」

「カミヤ、何かここは時間軸が特殊らしくて時が止まってるらしいよ？」

「マジすか……。ま、たまには過去を振り返るのもいいかもな」

「私はカミヤに出会うまでの話も聞きたいしねー」

「仕方ない、それじゃ話してやるか……」

「これまでのあらすじ」

ある日、尊敬する兄貴が行方不明になった。

家族や近所の人、警察にも連絡したが見つからなくていつしか俺しか探していなかった。

それで1ヶ月ぐらい経ったときに突如俺の部屋に案内人が現れて世界を破滅さそうとしている兄貴を止めてくれていきなり言われて……俺は異世界に行ってしまった。

その途中に世界の主とかなんかに紋章の力を授かり、絶大な攻撃力（未完成）なんかを得て、俺は始まりの街「ラグライン」に辿りついた。

それから《神の塔》に行け、とフードの男に言われてまずはパートナー探しをする俺。

夕方まで探したのに美少女パートナーが見つからなかった俺は、そこでクオリナに会う。

鎖を壊したりして、彼女は何かパートナーになつてくれた訳だ。

パートナー
冒険者登録を済ませ、《神の塔》を目指すために街を出る俺達。

そついやこの途中で巨大熊に襲われた気がする。

夜中になつてようやく俺達は《神の塔》に行くルートにある「リグリス」という町に到着。

疲れてたんで即行で宿屋に泊まったが何かイベントが発生したような……。

次の日、レストランにて超特大ヘヴンチョコレートパフェを食べていると店がいきなり襲撃された。

ジーニスって人がデュアラという凶暴そつな奴から逃げてきてたんだっけ。

そついやジーニスって特に出番無かつたな。

で、入り口側がデュアラの能力によつて火事になり、いろいろあつてクオリナが襲われたんで俺は始めて戦闘モードになった。

ま、肩を丸焼けにされたり、いろいろ痛めつけられたが一瞬の隙をついて勝負は俺の勝ちに終わった。

起きたら治癒魔法をかけられていたな。

そこにこちらに向かつて歩いてくる人影を見つけ、俺も無理やり体を動かしてそいつの元に行った。

名前は知らないが灰髪碧眼だった奴は俺の兄貴……黒斗の手下だという。

そして俺を監視しているという奴は《神の塔》へ行く為の資格とやらをくれた。

あいつは何だったんだ？

「リギリス」を出発し、《神の塔》へと向かった俺達。

たどり着いてみたら、天まで昇るような塔でマジで焦った。

中に入ったら病的ライオンなどが待ち受けていて……地獄かと思うくらい螺旋階段が続いていたな。

何時間かしてやっと屋上に着いたら神と対面。

兄貴に片翼をもぎ取られていた。

神がひざまずかせてみるとかほざいたので俺達は挑発に乗って戦闘を開始する。

でも見た目以上に強くて死にかけたな。

俺の能力が覚醒しなかったら負けてた、うん。

ま、そこから奇跡の大逆転が始まったわけだ。

それでも最後は危なかったけどな。

そして水神に土下座をさせて、俺の能力の封印の1つを解除し……
…今に至る。

「まー、こんな感じだろ」

「そんな感じだねー」

「……あー、そーいやさ、次回から『風神編』が始まるらしいぞ?」

「風神編……となると第一章は『水神編』だったんだ」

「なんか新たな展開が始まるとか始まらないとか……」

「曖昧だね」

「ま、そんな訳でまだまだ神を土下座させていくつもりなんでよろ

しくー」

「今度も土下座させる気なんだ」

第一章 第特話 『これまでのあらすじ』第二章 風神編のお知らせ(後書き

そして第二章へと……。

噂ではシグマ側や黒斗の組織の話とかも絡んでくるとか……？

第二章も良ければ見ていただけると幸いです！。

第二章 第一話 『灰髪と狐耳』（前書き）

そついや作者は今日、5月22日が誕生日だったりします。
祝ってくれる方はメッセージでも送ってくださいと泣いて喜びます。
ま、そんな訳ですが第二章どうぞ。

第二章 第一話 『灰髪と狐耳』

靴を脱ぎ捨て、無造作にシグマは奥の部屋に入る。

部屋にはほとんど物が置かれておらず、存在を主張する物といえ
ば中心に置かれている円形のテーブルのみであった。

テーブルには一枚の紙が置いてある。

シグマはその紙を無造作に拾うと、中身を確認せずにクシャクシ
ヤに丸めてゴミ箱に投げ捨てた。

大体の内容は見なくても分かる。

下っ端に送られる糞な指令だ。

「まったく、何で連中もこんなくだらない指令書を送ってくるのか……。
俺はさらさらこんな面倒臭え事をする気は無いってのによ」

苛立つシグマに無邪気な顔で少女がはにかむ。

「シグマ様の目的はクロト様を倒す事だもんねー」

「リズリー、奴のことは様付けで呼ぶな。それと倒す事じゃなくて
殺す事だ」

「勇者になるんだよね」

「馬鹿かお前、例えば奴が極悪人だろ？が何だろ？が殺してしまえば
俺はお尋ね者だ」

勇者モノのRPGの趣旨を根底から覆しそうな意見。

「世界が滅びるのを止めるのに？」

「関係ねえよ、俺はこの世界を気に入ってないからな」

「ホント、クロトが来てからシグマ様この調子なんだから……」

「お前が気にする事じゃないだろ」

「そんな事ないよ！ シグマ様は私の」

リズリーの声は途中から外部からの介入により掻き消された。使われていない表玄関が強引にぶち開けられたのだ。

爆弾でも使ったのだろうか、扉が開いた瞬間、爆風が流れ込んできた。

爆風は周囲の物を焼き尽くす。

比較的、表玄関から近い部屋にいた彼等は避ける事もできず爆風に飲み込まれた。

「爆風が治まり次第中に入れ。標的は下っ端のクズだが、念のために生存確認を。万が一、何かが盾になって助かっていた場合は見つけ次第消せ」

「了解」

爆風が薄くなり、数人の男が居住地アシトの中に進入する。

標的は2人。

完全に抹殺しろという指令だった。

「おいおい、奴等の姿が見当たらねえぞ？」

だが爆風が止んでも2人の姿は見当たらない。

男達はそれを見て、

「ハッ、下っ端らしいし、消し飛んだんじゃないの？」

「そりゃ傑作だな、俺達はろくに仕事もせずに報酬もらってるってな」

「ヒヒ、あの黒斗様に逆らつていてこのザマだしな。焼却炉に放り込む手間が省けたつてもんよ」

そんな事を言って口々に笑い出す。

完全に気が抜けたのか、彼等は細かく周囲を確認する事も無かった。

それが彼等の敗因だとは知らずに。

「よう、下っ端以下のクズ共、俺に何の用だ？」

気が付くと、彼等の前にさっきまでいなかったはずの標的がいた。爆風に巻き込まれたのにも係わらず、その服には一切焦げ跡はついていない。

男達はこの状況でそんな事には気付かなかった。

いや、気付いていたところで結果は変わらないのだが。

「デメエ、生きていやがッ……」

1人がシグマに襲い掛かった。
だが触れることも無く男の腹が切り裂かれる。

「調子乗ってんじゃねーよ、下っ端の癖してよぉ！」
「大人しく俺達の金になつときな」

今度は2人同時。

彼等は銃を取り出して発砲する。

弾丸は魔弾、魔力で練られた強力な弾だ。

「糞野郎がよこした手下つてのはこの程度の雑魚か。俺を甘く見ているのか、奴がただ単に人材不足なのか……そんなのはどうでもいいか」

瞬間、シグマの前に烈風が吹き荒れた。

弾はシグマに当たる事も無く、見当違いの方向に飛んでいく。

動じる男達。

しかしシグマは、彼等に隙を与えない。

「うぐああア」

「ぐぐゅッ」

間髪いれずにシグマは男達を殴り飛ばした。

その手にはやはり烈風が渦巻いている。

「どうする、まだやるか？ 俺としてはまだウォーミングアップにもなっていないんだが」

その問いに残りの男は答えない。

ただし答えない代わりに、逃げることによって意思を示した。

下っ端の完全勝利だった。

「シグマ様ー、リズはどうすればいいのでしょうか」

「そのままそこにいていい」

シグマはあっさりリズリーの質問に答えると男達を追うように表玄関を抜けた。

人通りの少ない通りに、とてもよく目立つ全身を黒系の服で揃えた男がいた。

逃げ出した男達とは違う。

そいつらに指示を出していたリーダーだ。

「……俺の力量を量るために手下を先に行かせたのか」

「悪いが、こっちはまだ死にたくないんだ。少しくらい様子を見たっていいじゃないか」

「死ぬのが数分伸びただけなのにな」

ビュオッ！！

シグマの体が爆発的に加速する。
足元から疾風が発生したのだ。

数メートル離れていた間合いが一気に縮まる。

だが、シグマの攻撃がリーダーに当たる寸前、その攻撃は止められた。

「死ぬのが数分伸びた……ね。それはお前の事じゃないのかな？」

見ると、リーダーの前の土が盛り上がり、大地の壁ができていた。多少はシグマの攻撃によって挟られているが、防御性能はかなりあるようだ。

「1つ聞くがお前等は糞野郎の組織の何階層目にいる」

シグマがそんな事を言った。

「第3階層。より分かりやすくいうなら第3階層より上にのみ語られる名称……『神無き世界』の下っ端だ」

「……そうか、下っ端仲間だな」

「気は合わねえと思うが、酒でも飲むか？」

リーダーは苦笑する。

シグマは聞きたかった答えが返ってこなかったためか少し不機嫌だった。

「俺は酒は飲まない主義だ」

「飲めないんじゃないかってか？」

バゴオオオオオツ！！

轟音が炸裂した。

リーダーの精製した大地の壁が壊されたためだ。

シグマは右腕に烈風を集中させて言う。

「とりあえずその喉を切り裂いて、減らず口を叩かせなくしてやる」
「ハン、下端のクズがいきがりやがつて」

両者は一斉に攻撃を繰り出す。

この瞬間、大地と風の戦いが始まった。

第二章 第一話 『灰髪と狐耳』（後書き）

あ、説明無かったですけどリズリーは狐耳だったりします。
クオリナと似てますねしません。

え、獣耳萌え？ 何を言ってるんですか貴方は……当然じゃないですか。

第二章 第二話 『闇染めの街「イルゲラジュ」』 (前書き)

最近、忙しくて書く暇ありませんでした……orz
久しぶりに書くので書き方が若干変わってるかもしれません。

第二章 第二話 『闇染めの街（ハイルグラジュ）』

「あー……第二の塔にはいつ着くんだよ……」

俺は無造作に呟く。

実はこのセリフ、10回は言っている。

歩き始めてから5時間、疲労は溜まり続ける一方だ。

しかもそれに追い討ちをかけるように先ほどから猛烈な日差しが降り注いできている。

「うー……」

ジュー……

頼みの綱であるクオリナの生み出す氷も、すぐに溶けてしまつてあまり意味が無かった。

俺の《神雷》もこんな状況では何の役にも立たない。

何かこの蒸し暑さを解消するようなモノはないのだろうか……。

必死に氷を生み出すクオリナを応援しながら、俺は辺りを見回す。

見渡す限りの大地が広がっており、草も木もほとんど見当たらない。
い。

これで地面がさらさらの砂だったらもはや砂漠と呼べるだろう。

「しかし、こんな不毛の地に闇染めの街なんて存在するのか？」

俺は半ば投げやりになってここに来た目的に疑問符を浮かべる。
闇染めの街というのは、土下座させた水神から聞き出した情報だ。
奴によると「ハイルグラジュ」と呼ばれる闇染めの街に第二の神々の塔……風神が佇む場所があるらしい。

行きかたはこの辺に行けば分かるとほざいていたがまったく分からない。

この悲しいほど殺風景な地のどこに塔があるというんだ。
地下か？ 空中か？ 異次元か？

もはや思考能力も低下していた俺だったが、ふと前を見ると黒いサボテンが生えている事に気付いた。

ただでさえ、まともな植物が生えてないこの地で黒いサボテンっておかしすぎるだろ。

真っ黒だぞ、真っ黒、周囲から浮いているよマジで。

「……………あー……………」

「……………明らかに怪しいよね」

二人してうなずく。

ゆっくりとサボテンに近づき、とりあえず眺めてみる。

見た限り、色が黒いこと以外は普通のサボテンのようだよ。
いや、まあ絶対なんかあるんだろうが…………。

ガスッ

とりあえず、蹴ってみる。

針が靴を突き破り、足の裏に刺さった。

俺↓撃沈

まさか針が靴を貫通するなんて思っても見なかったぜ…………。

何てむかつくサボテンなんだ《神雷》で潰してやろうか。

と、思ったがさすがにそれは取り返しの付かない事になりそうな気がしたのでやめた。

あくまで、俺はな。

ズオオオオオオッ！！

気が付くと、サボテンに氷柱が振り下ろされていた。

「おい、オマ、ちょ、やめ……ッ」

俺の制止も届かず、クオリナはサボテンに強烈な一撃を与える。
よく見ると彼女の右手から少し血が出ていた。

サボテンに触って刺さったりでもしたのだろうか。

いや、そんな事は置いといてサボテンはどうなった！？

「……………ち」

「舌打ちッ！？」

サボテンは壊れていなかった。

それどころか傷1つ付いていなかった。

何これ、無敵サボテン？

「いやーでも、これからどうすれば……」

このサボテンが無敵なのは分かったが、どうやら闇染めの街とは
無縁のようだ。

早く、再びサボテンと相対しているクオリナを引き剥がして進も
うと思ったのだが、そこで徐々に視界が白く曇っていつていること
に気付いた。

敵かッ！？　　と思って俺は構える。

だがどこにも敵の姿は見えない。

「なら何故……」

「……………このサボテン」

クオリナがひたすら氷で叩き潰しているサボテン。

よく見るとそこから白い何かが噴出しているのに気付く。

「これh」

言葉を全て言い終わる前に視界が白で覆われ尽くされた。
感覚が全て消える。

消えて、消えて、消えて、消えて。

自分がどこにいるのかも分からなくなつて。

目を開けると。

まだ昼のはずなのに黒く染められた空。
薄明るく照らす月。

暑いどころか冷えすぎて凍えそうな気温。
不気味なまでに並ぶ黒い建物。

「ここが「イルグラジュ」なのか？」

「……………たぶんそうだと思うよ」

俺達はサボテンに導かれて闇染めの街にたどり着いてしまったらしい。

黒くそびえ立つ塔が遙か遠くに見えた。

そして——この街に辿りついた俺達を歓迎するかのようにな、
爆音が鳴り響いた。

第二章 第二話 『闇染めの街「イルゲラジュ」』（後書き）

あ、今回の話は76パーセント思いつきで出来ています。

何でサボテンなんだ、とかはツツコまないようにしてね（汗

第二章 第三話 『剛風VS土虎』（前書き）

ひっさじぶりー。

第二章 第三話 『剛風VS土虎』

爆音は近い距離から聴こえていた。

当然、これは俺達を歓迎しているようなものではないだろうと、なると。

「戦闘が起こっている、あまり平和な街じゃなさそうだな」

「休憩はできそうにないのかなー……」

ぐったりとした様子なクオリナ。

ただでさえ氷属性な彼女はさっきの猛暑とサボテンへの暴行で疲労していた。

「……まあすることもないんだし、ちよっくら戦闘を見に行つてから宿屋にでも行かね？」

—+×+—

爆音の発生地では戦闘が行われていた。

「ああ？ その程度か？」

大地が盛り上がり、柱のように飛び出したそれは各方位から一直線に標的へと向かう。

逃げられる隙間はほとんど無い。
だが。

「うおああアッ！！」

ズオオオオオオッ、と剛風が標的の周りを取り囲む。
剛風を纏った標的は柱がぶち当たる直前に、風を解放した。
溜め込んでいた力が解き放たれ、

「な……ッ！!?」

「舐めてんじゃねえよ、下っ端」

解放された風は柱を一本残らず消し飛ばした。

さらに柱は大地の破片となって男に襲う。

だがそれは男の目の前で粉末になり、土へと還った。

「……はッその程度か^{シグマ}君ッ!」

「そのくせ息上がってんじゃねえかロツジエさんよお」

「何故私の名を……ッ!」

はッ、と鼻で笑い、シグマはロツジエに向けて右手を上げる。
そして手に持っていたものを見せた。

「それはIDカードッ! テメエいつの間に!」

ロツジエはすぐさまそれが本来あったはずのコートの内側ポケットを見る。

（底が……切り裂かれているッ?）

「とりあえずコイツさえありゃ『神無き世界』とやらに入れるんだ
よな? ありがたくもらっておくぜ」

「ざけんじゃねエッ!! 早く返さねえと肉塊にするぞッ!」

瞬間。

ロツジエの周りの大地が震えだした。
徐々に大地が持ち上がり、やがて1つの形を作り出していく。

「……虎か」

まさしくそれは虎だった。

大地で形成された虎、けれどその体長は10m程もある。
シグマは特に焦る様子もなくそれを見つめる。

「余裕こいてんじゃねえぞオツ!!」

10m程もある巨大な土の塊がシグマへと襲い掛かる。

シグマは特に動こうとせず、大地で形成された虎の口が彼を飲み込んだ。

静寂。

イラツキで少し我を忘れていたロツジエはやがて自らの失態に気付いた。

「まいったな……これじゃ私のIDカードまで消えてしまったじゃないか。いや、どうせ上層部に頼めば数日で手に入れる事ができるか、まあ再発行されるまでの間は面倒なわけだが」

そういつて彼は土塊の近くへと歩いていく。

一応の死体確認とIDカードが運よく見つかるかもしれないからだ。

ロツジエは右手を土塊に付け、大地を操……、

ズガオオオオオオオオオオオツツツ！！！！！！

鼓膜が破けるかのような爆音が鳴り響いた。

発生源は土塊。

これはロツジエによるものではなかった。

ならば。

（まさか……あの攻撃で死なないっていうのかッ？）

中心部から粉々に破壊されたそれはもはや虎の形を保っていない。そしてその中から出てきたのは。

「バーカ、余裕こいてんのはそっちじゃねえか。浮かれてる暇があるんだったら俺が生きてる可能性を考慮して逃げときゃ良かったものをよ」

無傷のシグマだった。

「……は、は」

「まったくこれが teme の全力だよ。こりや俺が本気だすまでもねえよなあ」

本気だすまでもない。

ならばさきほどの戦いは全て手を抜いていたともいうのか。

ロッジエの額から汗が流れる。

逃げよう。

本能は告げている。

こんな奴に敵うわけが無い、と。

だが、足はもつれて上手く動かなかつた。

（ならばせめてものガードをッ！！！）

必死に土壁を前に展開させる。

「さあて、遊びが終わったらお昼寝の時間だぜえ」

シグマの両手から生み出された烈風は槍をかたどり、土壁を貫き、

ロツジエをも貫通した。

バシユウウウウウウウッ

ロツジエが倒れていく様を見てシグマはぽつりと、

「IDカードを奪った時点でもうテメエに用はねえんだよ」

そういつて路上を去ろうとする。

と、そこでリズリーが待っていたことに気づき、彼女を呼び戻そうと後ろを振り返り、

奥に見知った顔つきの男とそのパートナーがいるのに気がついた。

第二章 第三話 『剛風VS土虎』（後書き）

水泳の授業で精神的に死にそうです。

第二章 第四話 『交差（雷 and 風）』（前書き）

神也とシグマの2度目の出会いです。

自分的には神也を書くよりシグマの文書いてたほうが好きですね！。
でも一番書きやすいのはリズリーでしょうか。

第二章 第四話 『交差（雷 and 風）』

爆音の鳴り響いた現場が目に入る。

だがもう戦闘は終わったようで周りには静寂が続いていた。

一体誰と誰が戦っていたんだ……？

俺は大地が激しく隆起したその戦闘痕を見て疑問を抱く。

数秒後、見えたのは地面に横たわる男と、
何やら見たことがあるような少年だった。

「あいつって……」

「ああ間違いない。前に「リギリス」で《神の塔》へ入るための力
ードを渡してきたやつだ」

「勝手にやってきて勝手に恩売りつけてきたよね」

「……まあ親切キャラではあったな」

何かクオリナのキャラが壊れつつあるな―と少し思いながら俺は
そいつを見る。

うわぁ……凶悪そうな顔だこれ。

しかも何かこっち見てるし睨んでるし怖っ！！

あれ？ 何か10代前半気味の獣耳少女があいつに近づいてる？

「うわぁ……危ない危ない離れたほうがいいって……」

「獣耳……かぶってる」

そして離れる―俺の獣耳2号（1号はクオリナ）オオオッ！！
と叫ぼうとした時。

「シーグーマー様ー」

ふみやあ、と獣耳2号が奴に抱きついた!?

シグマと呼ばれたあいつも何かさっきまでの険しい顔が消えているぞ!!

「待たせたのは悪かったから今すぐ離れろ」

ぐいぐい

シグマは抱きつく少女を押しつけようと……、

って何でコイツは押しのけてんだよ!? そこは愛でるところだろうが!

「リスだつてパートナーなんですから戦わせてくださいよー」

「バカか、お前の魔法は補助向きだろーが」

「でもずっと待ってるなんて嫌なんですよう」

「分かったから離れろ、イベントはもう開始してんだからよ」

? と自身をリスと呼ぶ少女は首をかしげ……

あれ? シグマ君たらコツチにやってくる?

何でコツチ見た瞬間にまた顔が険しくなってるの!?

刹那、ビュオオオ、と風が俺の前を吹き抜ける。

と、ものすごい速さでこっちにキタ——ッ!!

瞬間的に俺は右手に《神雷》を生み出す。

水神での第二解放以来俺は《神雷》を自由に生み出せるようになってるのだ。

クオリナも何かを感じ取ったのか氷でサーベルを形成していた、
怖えよ。

さすがに敵じゃないであろう人に獲物を向けるのはちょっと俺

は思っんですが。

まあ俺も人の事言えないけどさ。

トン、とシグマが少女を連れて俺の目の前に着地した。

「よお久しぶり。どうやら絶賛、神潰しライフを楽しんでいるようだな。水神は雑魚だったか？」

そういつてシグマは右手に烈風を生み出し、俺の鳩尾へ……、
が、間一髪、雷撃で受け止める。
いやあマジで用心しといて良かったぜ……。

「俺はシグマだ、シグマ」ローグリー。ま、覚える必要はねえがこれから会うことも増えそうだしなあ」

何だコイツいきなり自己紹介か？

っーか会う事が多くなるってどういう……。

「……俺は神也、外庭神也。んで、コイツがパートナーのクオリナ」
「……………」

俺は横にいるサーベル持ちの狼耳少女の肩に手を乗せる。

だが何かむつすりしてますが何故だろう。

気になってその目線を見るとシグマの横に立つパートナー？
のような少女。

いやー、獣耳あたりがものすごく似てますねー。

同属嫌悪ってやつなのかもしれないな。

「リスはリスリーです。バイオレンスな主人を持っていますが一
くお願いしますね」

「誰がバイオレンスだ」

「痛っ！　そこグリグリしないでシグマ様！」

「……何か楽しそうだな」

クオリナにそう呼びかけてみるが返事は無い。

彼女は小声で、

「性格はかぶってないから気にすることはないか……」
と呟いていた。

その後も何かぶつぶつ呟いていたが何かもう聞くのが面倒くさくなってきた。

仕方ないので仲良しムードは壊したくないがシグマ達の会話に入ろうとする。

ものすごく核心をついた話だが、まあいいだろう。
いろいろと知ってそうだな、こいつら。

「なあ、この街のどこに《神の塔》はあるんだ？」

物語は2グループを惹きつかせあい、交差する。

世界を賭けた戦いになる日もそう近くないのかもしれない。

第二章 第四話 『交差（雷 and 風）』（後書き）

タイトルの割には内容薄いよ！

雷と風も一度しか激突してないしね。

次回からは4人行動らしいです。

絶対息合わないよなあこいつら……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6861k/>

神？ ああ、俺の前で土下座してるよ

2010年11月19日00時40分発行